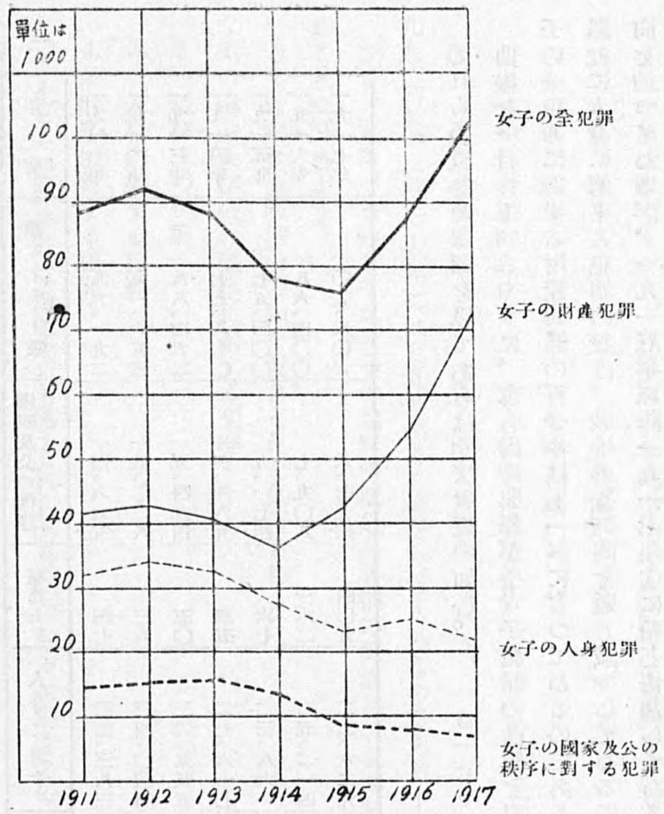

これらの四個の犯罪集團を夫々考察するに、國家及び公の秩序に對する犯罪に就ては、一九一三年より一九一七年までに總數の五〇%以上も減少してゐるのであるが、(十八歳以下の少女に於ては僅かの減少であるが六十歳以上の女子に於ては九五・九%も減少してゐる)、これは必ずしも當てにはならない。蓋しこの總數は心理學的に異つた種類の犯罪を含むものであるからである。即ち、家宅侵入、執行官吏に對する反抗、騷擾、大逆罪等の外に、營業法に對する犯罪、換言すれば女工、少女工等の日曜休業及び店仕舞に關する就業規則の違反を含むのである。認可義務に關して、コッペンフェルス[12]は殆ど犯罪的な不正とは認められぬこの義務の違反に、減少を來したことが前述の總數の減少に大きな役目をなしてゐることを示したことであつた。この營業法の諸規則を遵守することに對しては、戰爭中殆ど監督がなされなかつたのである。(第一〇七頁以下少年に關する節の詳論を參照せよ)

12 Lit. 226, S. 18 f.

さて、これらの營業法犯罪の數を除いてみると、その殘餘の「國家及び公の秩序に對する犯罪」(刑法第八〇條——第一六條、第四九條a)は總數次の如くであつて、餘り思はしい狀況を示して居らぬ。

	有罪女子
一九一二年	四、三九九人
一九一三年	四、八二二
一九一四年	四、三三一
一九一五年	三、七八三
一九一六年	四、二四四
一九一七年	五、一六六

初期には非常に喜ぶべき發展のあるにかゝはらず、其の後一九一六年には急變し、一九一七年には

既に平和時の狀態を越してゐるのである。

この集團に屬するもののうち、なほ數的に意義多き犯罪を研究しよう。

官吏に對する暴行、脅迫の廉により有罪とせられた女子は

一九一二年	一、〇二一人	九八六人	
一九一三年	一、〇七三	一、二八八	
一九一四年	九四三	一、三六二	
一九一五年	九八六	一、七八二	
一九一六年	一、二二四	一、七五七	
一九一七年	一、二五六	一、三六八	
一九一八年	九二七	一、四三五	
一九一九年	七一八		

かく、一九一四年には官吏に對する暴行、脅迫による有罪は著しい減少を示してゐるが、一九一六年には既に平和時の狀態を凌駕し、一九一八年以降は再び減少が起つて居る。が、一九二一年頃より再び急激に增加し始め、一九一四年の約二倍となつてゐるのである。以後一九二六年迄は、單に憂慮すべき極めて僅かな有罪數の減少が生じて居るに過ぎない。一九一七年までの年齡別統計によれば、この年に至るまではこの數の增加の責任は專ら三十歲と六十歲との間の壯年者にあることが認められる。[13]

そしてこれらのうち、主に既婚者は戰爭前に既にこの犯罪に關與して居つたのであるが、今や戰時となるや、その割合は婚姻の減少してゐるにも拘らず、二倍まで增加したのである。食糧、衣服等の制限分配の時期に於ては、既婚女子は殆ど毎日、食糧券、購買豫約券を求めて官廳に赴かねばならず、その數は戰前に比して、何といつても、遙かに多かつたことを考慮に入れれば、以上の增加はこれを理解することが出來やう。かくの如く全能の官廳に赴くことは平和の時とは異つて死活の問題に關係し、多分端的には切實な糊口の資を維持する問題となつたのである。他面、益々權力と支配の力の增大した官廳が、程度の差はあれ、休戰がその後のインフレーション時の重大な心配と榮養不良とによつて、神經的にも肉體的にも弱められた女子にとつてを屢々挑發的な態度で示したといふことを見紛ふてはならない。要するに、戰時及びその後のイン[14]は、官廳は正に摩擦面であるに充分であつたことを見紛ふべきではない。コッペンフェルスは、三十歲——四十歲の既婚女子がかくの如く多く關係してゐるといふ事實から、折々激しい興奮狀態を伴ふ月經閉止期のために、四十歲——六十歲の女子が多く官吏に對する暴行、脅迫の廉で犯罪を犯すに至るのであると結論してゐるのであるが、それは恐らく間違ひのないところであらう。

13 v. Koppenfels, Lit. 226, S. 21 f.

14 Lit. 226, S. 22.

家宅侵入は次の如き數字的發展を示してゐる。即ち、有罪と判決せられた女子は

一九一二年	二、〇二二人
一九一三年	一、九三三
一九一四年	一、六三三
一九一五年	一、五五五
一九一六年	一、六九〇
一九一七年	一、六三四
一九一八年	一、六六八
一九一九年	一、〇五四
一九二〇年	一、六三七人
一九二一年	一、二九八
一九二二年	七〇三
一九二三年	一、〇三三
一九二四年	八九四
一九二五年	八五二
一九二六年	七四八

大體に於て、この數字によつて、家宅侵入による有罪判決は一九一二年以後可成減少してゐるのを看取することが出來る。その減少傾向は一九二一年以後家宅侵入が親告手續に從ふことになつたために、自然、統計的に更に著しくなつてゐる。

この減少には獨身の少女は少しも參加しては居ない。十八歳以下の者にあつては少程度の增加さへ認められるのである。が、その數が少いので全體に對し重要な意味を持たぬのである。最も著しく家宅侵入による有罪の減退の原因となつたものは、戰前に於て有罪の多かつた三十歳以下の年齡階級である。[15]

15 Elsendorf.

女子に於ける家宅侵入による有罪のかゝる減少を來した原因については必ずしも明らかではない。恐らく、仕事の上にも、家庭の上にも、女子は餘りに多くの心配を有し、疲れ果て、弱くなつたために、平和時には殊に裏長屋に常に限りなく多かつた喧嘩口論——それは多く、心理的には侮辱罪と密接な關係を有する單純な家宅侵入の機會となつたのであるが——に入り込むことがなくなつたのであらう。反面には、從來住宅難も家宅侵入の機會を著しく增加して居つたものであることを考慮すべきであらう。

女子の家宅侵入犯罪の發展に於ける この良き印象は、重き家宅侵入と心理的に密接の關係があり且つそれを含むところの騷擾（Hausfriedensbruch）、多衆聚合（Auflauf）及び暴動（Aufruhr）の發展を顧みるとき、激しく亂されるのである。

戰前に於ては、この集團犯罪に於ける女子の地位は殆ど問題とならなかつたのであるが、一九一八年に至るや統計は二三三件の有罪數を示し、一九一九年には、三〇四件を數へ、そして一九二四年には一、〇七〇名の女子有罪者を示すに至つたのである。其の內容は多く食糧一揆（Lebensmittelkrowalle）であるらしい。兎も角も、この數字は戰爭の後期及び戰後の經濟的に破滅し暴行にまで至らしめた狀態の明白な兆候である。

國家及び公の秩序に關する其の他の犯罪は數的には大して問題とならぬ。しかし、ある意味に於て兆候的なものとして、こゝに述ぶべきことは、「大逆罪、背叛罪、親交國に對する敵對行動、公民權

の實行に關する重罪及び輕罪、軍事的狀態の漏泄に關する規則の故意の違背行爲」によつて有罪とせられた女子は一九一三年には一人であつたが、一九一八年には三四人となつてゐる。

職務上の重罪及び輕罪によつて有罪となつた女子の數が增加したことは、兵役義務ある官吏が女子の官吏によつて補充せられた程度がどの位であつたかを思ひ起すとき、極めて明白である。贈收賄の事案を除き、一九一五年には十人、一九一七年には二〇〇人、一九一八年には四三三人の女子官吏が有罪となつてゐる。一九一九年以降には男子の官吏が再び舊の地位に歸つてゐる。これに應じて、女子官吏の犯罪は、一九一九年には一二八人に、一九二一年には三七人に、一九二三年には四一人に、一九二四年には二九人に減じてゐる。女子官吏の有罪者の年齡階級について は一九一七年までが判つてゐる。卽ち、十八歲より二十五歲までの者が最も大きな割合を占めてゐるのである。これに補充的に附加すれば、一九一八年に於て、郵便・電信犯罪（封緘の開披、小包及び信書の隱匿）により有罪となつたもの七二九人のうち、二五九人は成年女子の官吏、三〇三人は少女の官吏であつたことである。しかし、これらの數の總ては女子官吏の總數に比すれば僅かなものであり、戰時に於ては平和時に於けるより官吏は遙かに多くの要求を充たさねばならなかつたことを考慮するとき益々然るわけである。[16]

16　本書第三四頁以下參照

最後に囚徒逃走罪の數は注目すべきものがある。卽ち、有罪女子は

一九一三年	一四五人
一九一五年	九二
一九一七年	二二〇
一九二〇年	七六
一九二三年	一五六
一九二六年	一五〇

戰時中に關しては上記の數のうちにはこの犯罪の過失犯が最も著しい地位を占めてゐる。增加は先づ第一に三十歲——四十歲の女子にあらはれた。この數について戰時中屢々行はれたやうに大騷ぎをすることは、コッペンフェルスの反對するところであるが、[17]それは尤もなことである。增加、殊に成年女子に於ける增加については、一九一八年迄は次の事實から大して無理をせずに說明できるのである。卽ち、非常に多くの捕虜が地方の農家や農場で働き、從つて戰場に出てゐる男子の代りに家計を賄つてゐる女子がこの捕虜の監視の責任を負はされてゐたのである。

17　Vgl. z. B. Steckel, Lit. 398; Grabinski, Lit. 131; Bloch, Lit. 28; Beck, Lit. 17.

人身に對する犯罪の主な構成要件については有罪の絕對數は次の如き數列を示してゐる。

人身に對する犯罪

——により有罪とせられた女子は——

年度	謀殺	故殺	傷害			
			輕き傷害	危險な傷害	過失傷害	侮辱
一九一一年	一三	三二	二、四五七	七、二八四	一七六	一七、四八三
一九一二年	一一	二六	二、四六三	七、二八八	一八二	一八、八八一
一九一三年	一〇	三一	二、三四六	六、九二三	二二七	一七、六九七
一九一四年	一六	二五	一、八六一	六、一〇七	一七一	一三、九四四
一九一五年	一三	二三	一、八五〇	六、四五四	一九五	一一、〇八五
一九一六年	一九	二八	一、八九九	七、一〇七	二三三	一一、六一七
一九一七年	一〇	二八	一、六六五	六、一八九	二四八	一〇、九〇〇
一九一八年	二〇	三二	一、八五二	六、八九七	二四〇	一一、七三三
一九一九年	一八	五九	一、三七一	四、六〇九	一一五	七、三九七
一九二〇年	二九	四六	一、八一六	五、九二八	一四〇	一三、一六六
一九二一年	二五	六九	一、七七五	四、六一八	一九二	一六、四四三
一九二二年	二三	四六	一、四四一	二、八八五	一四五	一三、九〇九
一九二三年	二〇	四八	一、七四二	一、九三七	一六七	一六、九二九
一九二四年	三五	七二	一、二七七	一、七一四	一五六	一三、二五六
一九二五年	三四	四三	一、三八四	一、六九九	二〇二	一三、六六九

一九二六年	二六	五八	一、三六二	一、七七二	二八三	一二、五二六

先づ第一にこの表に於て驚くべきことは、女子によつて爲された謀殺は、戰爭の終りに近づくに從つて漸次增加し、一九二四年には約三倍にまでなつたことである。故殺の發展もこれと同樣である。ただ異つてゐる點は故殺に於ては一九一六年に既に上昇が始まつてゐることである。故意の殺人犯罪について、一九一七年までの女子犯人の年齡階級を調べるに、二十一歲迄の年齡階級については有罪者は次の如くになつてゐる。

一九一二年	九人	一九一五年	一四人
一九一三年	一〇	一九一六年	一五
一九一四年	八	一九一七年	七

有罪女子の年齡階級を二十一歲より三十歲——女子として壯年である——の間につき觀れば、

一九一二年	一一人	一九一五年	九人
一九一三年	一五	一九一六年	二四
一九一四年	一九	一九一七年	二四

卽ち、戰時の二年間のみに於てではあるけれども、非常な增加を示してゐる。これに反し、三十歲

及びそれ以上の年齢階級に於ては戰時に減退を示してゐるのである。卽ち、

一九一二年	一七人	一九一五年	一三人
一九一三年	一六	一九一六年	七
一九一四年	一三	一九一七年	七

女子によつて爲された殺人犯罪の心理は、遺憾ながら未だ正確には研究されて居らぬ。われわれの信ずるところでは、女子による殺人は强い性的及び感情的障害（嫉妬、虐待）からのみ說明されるのであつて、純粹に經濟的な理由から說明されることは極めて稀である。戰爭によつて女子に總じて緣の遠い犯罪が非常に增加したことは、女子が戰時に於て、戰前には男子の仕事であつたところの未だ爲したことのない仕事を强制されたことと關聯してゐる。[18]

18 Exner, Lt. 87, S. 153.

更に考へられることは、戰爭による女子の性的障害の著しい心理的影響であり、過勞、貧困、葛藤により又男子又は女子の側の不品行、不貞により起された精神の興奮である。結局、道義の一般的な頽廢と「人間生活の墮落」（エックスナー）である。それは單に戰線の兵士ばかりでなく、國內の軍隊、竝に世界大戰と時代を同じくした者の總てを襲つたのである。

その外、故意の殺人犯罪に於けると全く同樣なものは强盜及び準强盜的恐喝（räuberischer Erpressung）による有罪數の發展である。その女子により犯されたものは

一九一二年	一五人	一九一九年	二九人
一九一三年	一八	一九二〇年	二七
一九一四年	一三	一九二一年	五七
一九一五年	二〇	一九二二年	四六
一九一六年	三八	一九二三年	二三
一九一七年	三二	一九二四年	二五
一九一八年	一六		

女子の數が非常に少なく、そのため一般的な結論は引出されないのであるが、それにしても、次のことは特徵的なことである。卽ち、一般には女子によつては犯されなかつたこの犯罪が、一九一六年及び一九一七年に於ては、一九一二年一三年の平均に對し二倍の增加を示してゐるといふこと。一九一八年には數字は再び一六人（平均）に減退してゐるが、一九二一年までに五七人——戰前の狀態に對し二倍以上——に增加し、それから有罪は減少してゐるが、しかし、一九二四年の狀態はなほ戰前の狀態以上であるといふこと。

少くとも戰時について、滿足な發展を示してゐるのは其の他の人身に對する犯罪である。

傷害による有罪は一九一三年から一九一七年までに三八%を減じてゐる。勿論、早くも一九二一年に於て再び戰前の狀態に達したが、一九二六年までは戰前の狀態を目標として進んでゐる。戰時に於

ても亦、女子の犯せる侮辱は主として既婚によつてなされたのであるが、しかし、婚姻の減少と寡婦の増加といふことより生じた錯誤原因を除いても、コッペンフェルスの計算せる以下の概観の示す如く、有罪數の減少は獨身者に於けるより既婚者及び寡婦に於て著しい。侮辱により有罪とせられたものは

刑事有責の女子十萬のうち

年度	獨身女子	既婚女子	寡婦又は離婚女子
一九一〇年	二四・五	一二一	六二
一九一七年	一七・二	七〇	四一

これと一致して、少女の各年齡階級を通じて認められる減少は最も少ないのである。コッペンフェルス[19]に從ひ、一九一三年から一九一七年までに於ける減少は個別的に見て次の如くである。卽ち、

十八歳未滿の女子	二七%
二十一歳——二十五歳	三七
四十歳——五十歳	三八
十八歳——二十一歳	二五%
三十歳——四十歳	四〇
五十歳——六十歳	三五

19 Lit. 226, S.20.

屢々侮辱と同樣な原因に依つて生ずる傷害は、女子に關する輕き態樣のものに在つては、侮辱と同樣な發展を示してゐる。殊に一九一七年に於ては減少が著しい。たゞ、女子に於ては、戰後の輕き傷害による有罪數は戰前の狀態には達してゐないのである——これは侮辱の場合と反對である。危險なる傷害は上方に（一九一六年及び一九一八年）下方に（一九一七年）、極めて僅かな動搖を示して居り、輕き傷害に於けるが如くには滿足な狀況を示してゐない。戰後に於ては戰前の狀態より遙に以下にまで漸次的な減少が起つてゐる。これは統計的には一九二一年以來危險なる傷害を告訴手續に屬せしめたことによつてひき起されたものである。侮辱の場合のやうに、一九一七年までは危險なる傷害に於ても亦獨身女子は既婚女子及び寡婦よりも品行の惡かつたことを認めることができる。十八歳及び三十歳の間に於ては、獨身者の有罪數は戰前に於けるよりもなほ多くなつてさへゐるのである。戰前の三年間に於ける平均と一九一七年とを比較して、コッペンフェルス[20]は十八歳より二十一歳の年齡階級のみが有罪の增加を示し、一方、減少の認められるものでは、三十歳より四十歳までの年齡階級に於て最も著しい減少を示してゐるのである（一三・七%）。

20 Lit. 226, S.98.

侮辱と傷害とに關する女子犯罪のこの統計的な發展の原因はこの犯罪の總犯罪の發展について既述

したものと同様である。（第五〇頁以下參照）　榮養不良と驚愕と心配とによつて增加した疲勞困憊は、女子に於てもこの犯罪を犯すに必要な活力を抑壓したのである。フォン・コッペンフェルスは、戰時に於ては、女子の侮辱及び傷害の犯罪にとつて重要なる機因となるべきものが廣範圍に亙つて喪失したことについて言及してゐる。[21]「女子が侮辱の犯罪を犯す場合はそれは大抵夫に關してである。傷害と同樣に、法廷に大團圓をもつ女子の侮辱的な言葉も、凡ての場合ではないにしても多くの場合、夫か又は戀敵に向けられるものである。そこで、若し夫が戰線に行つてゐたとするならば、それによつて大抵の嫉妬と復讐の原因はなくなるし、夫婦喧嘩の可能性もなくなるのである。このことは又、平常の場合はこの犯罪を犯しがちな既婚者と寡婦が、戰時に於ては比較的めぐまれた狀態にあることを說明するものである。最後に、夫の不在が强い原因となるのは、その不在が被害女子の側に存し、極めて稀なことではあるが、被害女子が侮辱事件を一生懸命に有罪にまで押し進めるのに、夫の不在なためにそれに何等顧慮する必要のないといふ場合に限るであらう。

21　Lit. 126 S. 93.

常に僅かに止まつてゐた女子の過失傷害の有罪者は故意の傷害と相對して、早くも一九一四年から增加し始め、一九一七年に頂點に達してゐる。その外、過失致死の有罪數もこれと同樣の發展を爲してゐる。戰後に於ては、兩者ともに再び一九一四年の狀態又はそれ以下に下降してゐる。かゝる戰時に於ける過失犯罪の增加の原因は、大量にあらはれて來た女子の・電車運轉手、鐵道官吏、車掌とその每日平均八時乃至十時間の勞働時間とであり、それは榮養の缺陷と相俟つて過勞を生じ交通事故を齎らしたのである。[22]

22　v. Koppenfels, Lit. 229, S. 29.

女子によつて爲された性的犯罪（Sexualdelikten）のうち、淫行媒介（Ruppelie）、墮胎（Abtreibung）、嬰兒殺（Kindestötung）及び棄兒（Kindesaussetzung）がその數最も多い。この三者の構成要件は戰前も主として女子によつて犯されてゐたのである。（第一七七頁參照）

淫行媒介については、戰時も戰後も、以下掲ぐる有罪の絕對數によつて明らかなる如く、大半は戰前と同じく女子によつて犯されてゐる。（括弧内は全有罪數）

一九一二年	二、二四六	（二、五五七）
一九一三年	二、二九七	（二、六七〇）
一九一四年	二、四一六	（二、七八一）
一九一五年	二、一〇六	（二、三〇〇）
一九一六年	一、八五二	（一、九六三）
一九一七年	一、四〇八	（二、六七〇）
一九一八年	一、一七六	（一、一九八）
一九一九年	六五八	（　六七九）

一九二〇年	八三三	（八七九）
一九二一年	一、二四六	（一、四四八）
一九二二年	一、四〇〇	（二、〇二三）
一九二三年	一、二八六	（一、四九五）
一九二四年	一、五二二	（一、八一二）
一九二五年	一、七二六	（二、五八〇）
一九二六年	一、七三九	（二、五五〇）

かくの如く、戰時に於ては著しい減退があり、戰後に於ては再び戰前の狀態に近づいてゐるのである。戰時に於ける減少は總ての年齡階級及び家庭狀態について均等にあらはれてゐる。

淫行媒介の發展から何等か犯罪學的な結論を引き出すことは甚だ危險である。フォン・コッペンフェルス[23]はフォン・ヘンチッヒと共に、この減少を、性交が自由となつたこと、獨立するやうになつた少女が屢々相手の男と同棲するやうになつたこと——これは戰後に流行した結婚熱を又容易にしたものであつた——に歸すべきであると信じてゐる。この事實は正確であるやうであるけれども、戰後の淫行媒介の統計は、しかし、このことが戰時の有罪の減少の理由であることを裏切つてゐる。この減少に對し決定的なことは、寧ろ、先づ第一には、警察署と檢事局が、この時代に、財產犯罪の激增のために淫行媒介を訴追するの餘裕をもたなかつたといふことである。然り、そして一九二五年と一九二六年とに於て再びこれらの官廳がこの單純なる淫行媒介に對して多くの精力を費したといふことは嘆かはしいことである。何となれば、淫行媒介は、われわれが警察國的な乃至敎會法的な見解の遺產として重荷を負ふやうに現在まで引繼いで來たやうな種類の犯罪構成要件の一であるからである。殊に第一八一條第二號の場合（妻、子、預り者等の淫行媒介）の如き刑の加重の存せざる限り、この構成要件は結局に於てわれわれの刑事裁判の大きな盧僞と恥を示すものであるから、刑法より消滅せしむべきである。蓋し、この場合に於ては、警察との軋轢とか密告とかいふやうなたちの惡いもののために訴追せられるのであつて、平素ならば耐へ忍ばれるところであり、又結局に於ては內緣的な性交の存するかぎり、必要[24]なものでもあるのである。それ故、ロマン語諸國、オランダ、イギリス、ロシヤがこれの處罰をなさぬことは極めて正當である。

23 Lit. 226, S 29f.

24 Vgl. Liepmann, Lit. 247, S. 114.

淫行媒介と共に戰時及び戰後の賣淫（Prostitution）も考察さるべきであらう。しかし、遺憾ながら、われわれはかゝる時代のその發展については何も知らぬといはざるを得ない。それは既に戰時に於て蔓延した、主に、妻から離れ從つて正常な性生活から離れてゐる極めて多數の兵士をもつ軍隊によつて蔓延せしめられた、と多くの者は主張する。[25] 兵站に於ては妓樓が繁昌したばかりでなく、廣く軍當局から默認され、否軍隊を性的な見地に於て緊張せしめ、從つて、陰氣な塹壕生活の後の氣分を引立

たすために、促進されさへしたことをあらゆる戰闘員は知つてゐる。——一方、專門家側の代表的な意見に依れば、戰時に於ては、女子は簡單な、有利な職業に就くことを得たから、賣淫は減退してゐるといふ。[26] この女子の勞働市場の有利な狀態は、勿論、戰爭の終了と共に、兵士が普通市民に復歸し舊の職業に就くに從ひ、漸次なくなつて來る。人はいふ、賣淫「景氣」も、若い男が內緣的な性交に關する新しい自由な見解のために最早賣淫を利用する必要もなく又利用しようと思はなくなつて來たから、下向きであると。この問題は、各種の問題、經濟生活と社會衞生の問題に關するとともに、刑事學者のみでは決定的な判斷を下し得ない・個人の心的道義的態度に關してゐる。

25 v. Koppenfels, Lit. 226, S. 30; Blaschko, Lit. 24.

26 v. Koppenfels, Lit. 226; Rupprecht, Lit. 355, 357.

戰後に於て立法と社會醫學の顯著な問題となり始めた墮胎は、概念上ではなく、心理的には性的犯罪集團の一に屬する。戰時に於ける有罪數は減じてゐる。——しかし、出生よりは遙に低い程度に於てである。一九一三年より一九一七年までの間に出生の數は五二・五%、結婚外の出生の數は四一・一%減じてゐるに對し、墮胎の有罪數は僅に一七・六%しか減じてゐない。[27] かくて、墮胎によつて妊娠の除かれた事案の百分率は實際に於ては增加してゐるのである。次表をみればこのことは明らかである。

27 v. Koppenfels, Lit. 226, S. 314.

年度	出生の總數——死生兒も含む	第二一八條による有罪	出生一〇〇に對する第二一八條の有罪
一九一三年	一、八九四、五九八	一、四六七	○・○七七
一九一四年	一、八七四、三八九	一、六七八	○・○八九
一九一五年	一、四二五、五九六	八九九	○・○六三
一九一六年	一、〇六二、二八七	九六九	○・一〇一
一九一七年	九三九、九三八	一、三九二	○・一〇三
一九一八年	九五六、二五一	九三〇	○・一四五
一九一九年	一、二九九、四〇四	一、九一六	○・〇七一
一九二〇年	一、六五一、五九三	四、二四八	○・一一六
一九二一年	一、六一一、四二〇	五、〇四七	○・二六三
一九二二年	一、四四六、八三八	三、五六五	○・三四八
一九二三年	一、三三三、六二一		○・二六七

墮胎の實際の範圍については、この數字は何等の見込も示してゐない。如何なる犯罪もこの墮胎ほどには、實際に爲されたものと處罰されたものとの懸隔が大きくない。流產全部の十分の九は犯罪の基礎によりて行はるゝものであるといふ流產の度數に關する見積は實際の範圍の認識に一步を進める

ものである。[28] 醫學上の經驗に從へば出生と流産との關係は益々前者の方に有利の様に推移してゐるのである。その場合に流産と第二一八條による有罪との間に開きの存するのは、事實と犯罪統計との間に懸隔の存することを示すものである。戰時に於て有罪部分は〇・一に增加してゐるに對し流産の百分率は一五%にまで增加し、[29] 一九二二年には有罪は〇・三四八%なるに對し、流産の指數は一三%に達してゐる！

23 Bumm, Lit. 45.

29 Ebendort.

年度	有罪判決	
	嬰兒殺による	墮胎による
一九一二年	一一九	一、三三〇
一九一三年	一三七	一、五一八
一九一四年	一三〇	一、七五五
一九一五年	一四五	九三七
一九一六年	一五七	一、二一〇
一九一七年	一五二	一、〇一三
一九一八年	一二六	一、四四三
一九一九年	九八	九八八
一九二〇年	一〇二	一、九九〇
一九二一年	八七	四、四〇八
一九二二年	一〇〇	五、一七八
一九二三年	七四	三、六七七
一九二四年	一一九	五、六二九
一九二五年	一七一	七、一九三

墮胎のあらゆる犯罪構成要件の總數と嬰兒殺(Kindsmord)とを比すれば、上の如き二數列を得る。

嬰兒殺が地方の獨立せざる少女の犯罪であるとすれば、墮胎は第一に獨立せざる女工によりて犯さるる犯罪である。後者に於てはその數は全く壓倒的に多いのである。例へば、一九一五年には、四五五人は工業從事者、一〇七人は農婦、一五四人は商業及び交通業に從事する者である點を見よ。

墮胎による有罪の發展は多くの點に於て問題である。一九一四年に著增を見たことは、多分、既に戰時現象であるであらう。卽ち、戰爭の當初に於て姙娠した少女や妻は、夫や戀人が歸つて來るかどうかを不安に感じて、墮胎をなすに至り、又は夫や戀人の戰死の後に墮胎をなすに至つたのであらう。戰爭の第一年目である一九一五年には著しく數を減じたが、一九一六年には早くも增加し、一九一七年には減じてゐるが、一九一八年には再び增加してゐる。一九一九年に有罪數が減じてゐるのは確に革命現象と看做すべきである。墮胎の無罪に關する宣傳が街路を滿たしたのは丁度その頃である。しかし、直ちにこれに對して更めて鬪爭が始められたことは明らかである。無罪の主張者に對して反對意見をもつたものがあらはれた。戰時に於ける墮胎の甚だしい增加に對して、訴追の異常な精力が用ひられた。それ故、有罪數は一九二一年までに四倍となり、一九二四年には五倍となり、そして一九二五年には一九一二年の數の殆ど七倍とさへなつたのである。この增加に對して、「少年」の數の動きはさほど著くべきものではない。その數は戰時を通じて減少し、一九二一年には一三五に、一九二四年には一四〇に增加してゐる。

――それは增加ではあるけれども、一九一三年にも既に一〇二の「少年」の有罪を算してゐるのであつて、「少年」の有罪の增加はそれだけでは一般數の發作的な數列に比すべくもない。それにも拘らず、「少年」の數は驚くべき狀態を示してゐる。卽ち、一五歲以下の少女に於ける墮胎による有罪は、一九一五年に二、一九一六年に四、一九一七年に再び二である！　そして十五歲乃至十八歲の者に於ては一九一三年に既に一〇〇の墮胎有罪者を觀てゐる。一九一四年乃至一九一七年には、一年に三四乃至九一件を數へて居り、十八歲乃至二十一歲の者に於て年一二〇より年二九二に增加し、二十一歲乃至二十五歲以下の年齡階級に於て一八五より三六九に增加してゐる。此の場合一番多いのは何れも一九一四年である。有罪者中に既婚女子の增加を觀たことも特徵的なことである。ベルリンの大學附屬病院に於て流產せる女子の八五%は既婚者である。一九一六年の有罪者中二十一歲乃至二十五歲の年齡階級に於ては、九三人が既婚者であり、その次の集團（二五歲――三〇歲）に於ては一九一四年に一五六人であり、三〇歲――四〇歲の集團に於ては同年に二六五人に增加してゐる！　最後に、歲をとれる女子の有罪も亦驚くべきものがある。卽ち、一九一六年、四〇歲――五〇歲に於ては、正に一四二人であり、五〇歲――六〇歲に於てすら一九一七年に五一人の有罪がある。（一九一四年には五四人！）そして實に恐ろしいことであるが、六〇歲――七〇歲の女子に於ては戰時中に三人乃至九人が墮胎によつて有罪となつてゐる。かゝる老女はこれを墮胎施術者に數ふべきことは自ら明らかである――が、姙娠者の數と第三者の數を分つことは犯罪心理學的な評價の目的からは重要であらう。

財產に對する犯罪は、第一に、一九一一年より一九二六年までの主なる構成要件の有罪の絕對數を列記しよう。

財產に對する犯罪――により有罪とせられた女子は――

年度	竊盜			橫領	贓物授受	詐欺	文書僞造
	單純なる	重き	累犯				
一九一一年	一九、八〇三	一、〇二六	二、四四七	五、〇二七	二、二六九	三、七二〇	一、一〇二
一九一二年	一九、九五一	一、〇二五	二、二八三	五、一四四	二、三九三	三、八七四	一、〇九五
一九一三年	一八、一九九	九六三	二、一五二	四、九八五	二、四四六	三、七七四	一、二二八
一九一四年	一九、五七二	九〇二	二、〇一七	四、七四八	二、一五九	三、四六一	一、二四一
一九一五年	二一、一七六	一、四三三	二、一七四	三、八四七	三、〇五四	三、五六三	一、二五七
一九一六年	二五、四五三	一、九一八	二、七六六	四、六五〇	四、八六二	四、三七一	二、〇二二
一九一七年	三七、七三五	二、九四二	三、二二三	五、九四一	七、七三四	四、七七四	三、三三七
一九一八年	四八、四〇三	四、二九〇	四、〇二一	七、七三〇	一〇、九五一	六、一二〇	三、五三〇
一九一九年	三二、五六五	三、一七一	三、七六二	四、八五六	六、九七八	三、六三七	一、五八八

一九二〇年	四四、六〇〇	二、九八九	三、七六六	六、五五七	一、四四四
一九二一年	四一、一五四	二、九九二	三、四三一	六、六六六	二、八三四
一九二二年	四一、一一一	二、〇七三	三、二八一	五、五一〇	一、一六七
一九二三年	五一、四五五	二、五〇〇	三、五八六	六、二一一	一、〇七一
一九二四年	三三、一九七	一、七七四	三、一一八	四、二五二	一、一九三
一九二五年	一八、五二八	九〇四	二、四一〇	三、八一五	一、一七三
一九二六年	一六、〇三五	七七一	一、〇九九	三、七二二	一、三八一

一般の財産犯罪と同じく、此の場合に於ても亦竊盜が最も代表的なものであり、「利慾犯罪」(Verm-
ögens-delikt)としての竊盜、贓物授受、それから横領、詐欺、文書僞造の順序である。

女子の竊盜犯罪[30]は女子の其の他の犯罪が下降してゐるにも拘らず、單純竊盜につき早くも一九一五年に增加の傾向を示し、翌年には益々激しくなつてゐる。一九一七年には一九一三年に對し二倍の女子が有罪となつて居る。一九一八年には有罪は四八、四〇三人であつて第一の頂點に達してゐる。戰後の第一年に於ては先づ輕度の減少があつたが、一九二三年のインフレーションの年には有罪者五一、四五五人となり、一九一三年の殆ど三倍となつてゐる。しかし、それ以後は驚くほど速かに減少してゐる、卽ち、一九二五年には平和時の狀態に達し、一九二六年には一九一三年より約二、〇〇〇人を減じてゐる！

30 v. Koppenfels, Lit. 226, S. 35ff.

重き竊盜による有罪は單純なる竊盜に於けるよりも激しい增加を示してゐる。一九一八年には一九一三年の四倍半の額に達してゐる。しかし、單純な竊盜に比較して著しい點は戰後に於て徐々に數が減じたことである。一九二三年もこの減少の傾向に辛うじて影響を與へたに止まる。一九二六年に女子の重き竊盜犯罪も亦一九一三年の狀態より著しく減じたのである。

女子の累犯竊盜も一般犯罪に於けると同じく單純な竊盜よりも遙に動搖のない發展を示してゐる。卽ち、有罪數は極めて徐々に進んで漸く一九一八年に、一九一三年の二倍足らずに達してゐる。そして同じ樣に徐々に減じて平和時の狀態以下に至り、一九二六年にはその半數に減じたのである。かくて、竊盜女子に於ても亦戰前の發展に比して竊盜總數に占むる累犯者の割合は減じてゐるのである。

竊盜の數の增加の責任は、統計の數に關する限りでは、卽ち、一九一七年までは、十八歲より三十歲までの年齡の若きものがこれを負ふてゐる。竊盜による有罪の增加は特に十八歲より二十歲迄の少女に於ては、兎も角、同年齡の男子に於けるより低く、且つ一般の平均より低くなつてゐる。十八歲より二十五歲までの年齡階級にあつては、戰前に於けると同じく未婚の女子が女子の竊盜犯罪に主なる役割をつとめてゐる。が一方、それより以上の年齡階級にあつては、この關係は反對になつてゐる。[31]全體としては、未婚者と既婚者との數的關係は戰前と同樣である。フォン・コッペンフェルスの計算

によれば、單純竊盜による有罪女子のうち

年度	未婚者	既婚者	寡婦又は離婚者
一九一三年	六七二	二七九	四九
一九一七年	六六四	二八〇	五六

31 Lit. 229, S. 36.

かくの如く竊盜寡婦の割合のみが增加してゐるのであるが、それは戰爭による寡婦一般の增加に比して大したものではないであらう。

女子の竊盜犯罪と相竝んで、贓物授受も亦同樣に甚だしい程度で增加してゐる。卽ち、一九一八年には一九一四年の五倍の有罪女子を算へ、一九二三年には七倍にまで及んでゐる！

この增加の原因になつてゐるものは——戰前に於けると同じく——若き女子よりも歲をとれる既婚の女子である。少女は好もしい數字は示してゐないにしろ、竊盜犯罪に於ては大きな割合を占めてゐた二十一歲乃至三十歲の年齡のものは贓物授受に於てはその增加が平均以下となつてゐる。未婚者は[32]贓物罪に於ては一般に既婚者や寡婦よりその占むる割合が少い。フォン・コペンフェルスの計算するところでは、十萬人の刑事責任ある未婚女子につき、一九一〇年には四・三人の贓物罪による有罪の未婚女子あるに對し、一九一六年には七・九人である。之と反對に、十萬人の刑事責任ある既婚女子につき、一九一〇年には一五人の贓物罪による有罪の既婚女子あるに對し、一九一六年には二九人である！

32 Lit. 229, S. 33

文書僞造の曲線も贓物罪におけると同樣に高低の差が甚だしい。それは一九一八年には一九一三年の狀態に對し殆ど三倍に增加し、戰後に於ては一九二三年までに戰前の狀態に減少し、このインフレーションの年以後は再び徐々に增加し始めてゐる。

竊盜、贓物罪、文書僞造は統計上同樣な發展を示してゐるが、詐欺と橫領はこれらと異つてゐる。

女子の詐欺による有罪は徐々に增加して一九一八年にその頂點に達してゐるが、未だ一九一四年の二倍とまではならない。しかし、戰後に於ては僅かながら減少が觀られ、一九二六年までは戰前の狀態を越すこと平均約二五%を續けてゐる。一九一七年までの家庭狀態と年齡階級の觀察によれば、年齡の多きものが年少のものより遙に良好な狀態にある。四十歲乃至五十歲の女子の有罪者は一九一七年に於て一九一三年よりも少くなつてさへゐるのである！[33]

トロムマー（Trommer）は正當にも次のことを注意してゐる——「ライヒ」の犯罪統計が想像的競合の場合には重き犯罪のみを數へる、卽ち、刑法第二六三條と第二六八條の構成要件の併合（Zusammentreffen）の場合には、重き文書僞造のみを數へる、從つて上述せる文書僞造の數字のうちには詐

欺罪の大部分が含まれてゐるといふことは、詐欺の統計に關して錯誤原因を觀なければならぬと。

33 Lit. 416.

横領は上述の表に於て一九一五年に減退を示してゐる唯一の財産犯罪である。それからその數は一九一八年までに戰前の狀態に對し一〇一・三%だけ增加してゐる。戰後に於ては一九二六年まで漸減し、一九二六年にはこの犯罪による有罪數は戰前の狀態に對し著しく以下となつてゐる。

女子の財産犯罪の形式と原因については、一般の財産犯罪につき既述せるところを參照せられたい。（第七七頁以下）そこで述べた・戰時及び戰後の社會・經濟の動搖に基く理由以上に涉つて女子の特質から說明を爲さんと試みても、それは全く無駄であらう。かゝる試みはたゞ思辨的な性質を帶びるに止るのである。何とならば、あらゆる資料に女子犯罪の個別的な事案に關する根本的研究が缺けてゐるのであつて、どの程度に女子の財産犯罪が特に女子的な特質を有してゐるかの唯一の手がかりがないからである。

しかし、女子犯罪の統計資料を全體として又個別的に通觀したのち、最後に、戰時に於てドイツ女子の地位に來した變化を簡單に言及して、統計的狀態を補足することは肝要であらう。この變化は充分に行きわたつたものである。蓋し「たとへ戰場、戰線に內外の差はあるにせよ、この戰爭は男の戰ひであるとともに女の戰ひでもあつたのである」（ユックスナー）。女子は極めて多くの場合に、戰場に召集されて行つた家長や扶養者に家庭內に於て代らねばならなかつたばかりでなく、國民經濟の全部に亙つて引き去られた男子の勞働力を廣く補はねばならなかつたのである。兩者ともに、かゝる範圍內のドイツ女子にとつては、戰時に於て戰前より遙かに爲すことを要求された新しき仕事であつたのである。戰時に於て子供を抱へ一家の家政を賄ふことは、食糧、燃料、衣服、靴などの缺乏の益々增加する時機に際しては、たとへ無資產でない家庭にあつても、本當に、それだけで既に甚だしく神經を磨り耗らすところの「日常のパンを得んとする戰ひ」であつた。[34] しかしこれらの主婦の如何に多くのものが、これ以外になほ、戰線にある夫の生命に對する憂悶、戰爭による損害に關する傷心、子供の教育に關する心配を負はねばならなかつたか！ この精神的の興奮に加ふるに、榮養不良の影響がある。それは、主婦が子供に先づ榮養を與へ自分自身を二のつぎに置いたために、特に彼女らに於て甚だしかつたのである。更にかういふことも知らなければならぬ。卽ち、戰時に於ける女子の性生活は榮養不良のため又夫の不在によつて强制された禁慾のために屢々著しく障害を受け、そして月經障害、下腹轉位等となつてあらはれ、又これらの女子の多くの者の一般の健康狀態を正しく精神的に害したのである。[35] 消毒料や、石鹼さへも缺乏して居たので出產は甚だしく危險となつた。卽ち、一九一三年には一萬の出生につき產褥熱による死亡は二一・九であつたが、一九一八年には三六・七四となつてゐる！[36]

34 本書第一〇六頁以下及び第一一三頁以下參照

35 Vgl. hierzu Fraenkel, Lit. 104; Hirsch, Lit. 177; Jaworski, Lit. 195; Kobes, Lit. 218.

家政の外になほも一つ所得の仕事に專心しなければならなかつた妻に於ては、事態はなほ疲勞の甚だしいものであつた。これに關する數字はないのであるが、非常に多くの者がさうであつたのである。これらの女子にあつては、たゞ家庭の必要な費用を得んとして、力を仕事のために殘りなく用ひ盡したのである。子供の監督や教育には何等の餘暇もなく又精神的な力も最早殘つてゐなかつた。これらの事態が如何に强く少年の戰爭犯罪にあらはれたかは、少年の節に於て既述したところである。

（第一一三頁以下及び第一二三頁參照）

戰爭が職業女子の數を著しく增加したことについては既述した。戰爭はまづ第一に女子の全勞働市場を亂した。以前はドイツの女子勞働者の大部分が從事して居つた紡績及び奢侈品工業は休業し又は然らずとするも著しく制限された。從つて戰爭の當初に於ては女子の著しい失業があらはれた。しかし頗る速かに、就中、軍需工業がこれらの失業した女子の勞働力を採用した。この發展については多少の數字がある。[37] 一九一四年には金屬工業に從事してゐた女子の割合は全員の六・六%であつたが、一九一七年には之に反し三二・五%となつて居る！ エッセンのクルップ鋼鐵工場に於ては一九一五年に全勞働者の一三・二%が女子であつたが、一九一八年七月には三七・六%となつて居る。一九〇七年と一九一六年の人口調査に於ける職業數の對比によれば、總ての職業を合して一九一六年の絕對數は八、八〇四、三〇四人が女子從業者、一三、〇二六、二四五人が男子從業者であつて、一九〇七年に對し女子に於て六二〇、一二三人の從業數を增加し、男子に於て四、七四四、五四七人の從業數の減少を來してゐる。一九一九年には工業及び鑛山業に於て二、四八八、五六二人の女子（一九〇七年に對し六三五、〇八八人の增加）と四、八八七、八〇二人の男子（三、八〇九、三三七の減少）が從業し、商業及び交通業には一、〇〇〇、八四三人の女子（二四二、八五九人の增加）と一、五七三、二一四人の男子（八一九、六三六人の減少）が從業してゐる。一九〇七年より一九一六年までに女子勞働で減少を來して居るものはたゞ農業及び林業竝に家政的な仕事のみである。兩者ともに戰時に於て如何に女子の勞働が工業化したかの證左である。一九一八年までは男女勞働者の數は、たとへ女子の數が男子の數を越すといふことはないにしても、屢々等しくなつたといふことは直ちに認めねばならぬ。

37 以下揭げた數字は Umbreit-Lorenz, Lit. 418, S. 345ff. に據る。なほ Corvey, Lit. 53; Reichsarbeitsblatt, Lit. 337, 338. を參照せよ。

さて、戰時に於ける女子の勞働については、それは平素ならば男子の勞働であるところの總ての部門に亙つて居たといふことを注意すべきである。電車の女車掌、女運轉手、女の郵便配達夫、女の自動車運轉手等々があつた。女子は榴彈を作り、飛行機のピストンとモーターを生產し、造船業に於ては壓搾空氣の穿孔器を使用し、爆藥製造工場に働き、そして光學の精巧工業にさへ入り込んだのである。この女子勞働の普及の原因としては多くの女子がよき賃銀（殊に一九一七年以降は）を得たとい

ふ點を數ふべきであらう。他面に於てはこの戰時の勞働は從業女子にとつて面白からざる影響を與へた。第一に女子は屢々身體的に過勞であつた。戰時の女子勞働者は以前に許されてゐた最高程度を越えて勞働時間を延長せしめられた上に、なほ居殘時間や夜業や休日業を强ひられた。そしてそれも從業に際しては、女子勞働者には多く何等の經驗ももたぬ苦しい、危險な、熟練を要する。責任のある勞働であつた。加ふるに高度の職業上の危險があつた（例へば爆藥其の他の化學上の戰時工業の如き）。法律に於ける勞働保護や安全の規定は戰時中は何處でもたゞ紙上のものに過ぎなかつた。榮養不良による衰弱の狀態をこれらに加へて考慮すれば、女子勞働者にとつて一般の疾病の外に災害や職業上の疾病の數が比率上增加することは決して不思議ではない。例へばデュッセルドルフ州のある大きな冶金工場に於ては一九一四年より一九一七年までに女子勞働者の罹病例は七一・二%を增加してゐる（當時の工場全員を一〇〇として計算する）[38]。

38 Umlreit-Lorenz, Lit. 418. Vgl. auch Havaier, Lit. 141.

戰爭の終ると共に、女子勞働者はたとへ戰前の程度までには至らぬにしても、著しく淘汰された。インフレーション時の產業上の好景氣は女子の勞働市場の一時的な改善を齎らした。

エックスナーは女子の戰爭犯罪の統計に臨んで女子犯罪の「男性化」について語つてゐるのであるが全く正當である。これに對應して、われわれの既に確證した如く、戰時一般にドイツ女子の大部分に於て全生活狀態の「男性化」がある。

第四章　結論と展望

戰爭犯罪の全様相は、その範圍の著しい量的な增加を示してゐるばかりでなく、又とりわけ、ドイツ國民の社會機構に及ぼした深刻な影響を示してゐる。二つの典型的な横斷面がこのことを明らかにしてゐる。卽ち、第一に戰時に於ける銃後者の集團、第二にインフレーション時の犯罪。一般の知識、經驗をあつめてくることによつて、前數章に示した結果を次のやうに區分することができる。卽ち、重き狀態犯罪（Zustandsdelinquenz）は相對的に不變であつた。それは確に減少しては居らず、寧ろ時勢の推移に適應して、交互に增加してゐるのである。風俗犯罪の領域に於ては、體質的に定められた現象に關する限り、かゝる短期間内に素質の著しい數的な變化があつたことは考へられない。しかし、戰時及び戰後の異常な諸事情、體驗、精神的な緊張竝に住宅難と失業によつて、平時に於ては確乎とした社會的存在を保つて衝動生活にも正常な經過を示してゐた多くの素質が、惡い方向に走つたことは、これを認めねばならぬ。戰後に於けるその數の明白な增加はこのことを示してゐると思はれる。戰時中には反社會者（Asoziale）、乞食、浮浪者、勞働嫌忌者等の大部が外觀上は減少したのである。一部は召集せられたのである。これらの人間が軍隊に於てどういふ行爲を爲し又犯罪、殊に不法退去、脫營等の犯罪にどの程度の割合を占むるかについて、組織的な經驗を批判的に用ひてその眞相を得んとしてもそれは常道ではない。又大部分は大工業化のために吸收せられたのである。虛弱な監置を要する者に關する限りでは、それらは戰時の榮養不足に當面して、身體的に特に反抗するの力を有しなかつたのである。今日に至つて初めて、反社會者の問題が再び廣範圍に亙つて尖銳化し始めた。しかし、戰爭犯罪の特徵となすべきものは、犯罪の從來健康なる人々の部分をおかすことが益々多くなり驚くべき程度となつたといふ事實である。このことは戰時經濟の諸規定に對する形式犯罪や違反にいひ得るばかりではなく、又これよりも鋭く重大な犯罪、殊に財產犯罪やこれに關聯する不良の形式にもいひ得るのである。從つて、教育乃至之に類する施設にあつては、戰時の「惡い」一年が幾度觀察を累ねても教育的な見地では「好い」一年であつたといふ注目すべき事實が生ずるのである。不良に陷るものの範圍が廣がるほど、それらの施設に於ては素質の良い、從つて教育的な見地からは見込のある人間の割合が增加するのであり、又犯罪數の減少する時期に於ては反對に、困難な、素質的に多少缺陷のある人間のそれらの施設に於ける割合は增加するのである。このことを意識してウィルマンス（Wilmanns）は反對の方面からこの問題を次の樣に極言してゐるのである。卽ち、重大な恐慌の場合には完全者（Vollwertige）にも犯罪に陷る危險が存するのであるが、秩序のある・榮えてゐる經濟生活の存する國家に於てはたゞ精神的に何處か低格の者（Minderwertige）のみが失敗するのであると。[1]

1　Wilmanns, Lit. 443, S. 74.

犯罪とその影響に關するこれらの考察は、戰時の經驗が犯罪とその鎭壓・防止の手段とに關するわれわれの觀念にどの程度の影響を與へたかといふ問題を論ずることなければ、完全ではない。これらの觀念の變化はわれわれの犯罪に對する觀念及び其の鎭壓と豫防の手段に影響を與へ、そしてそれによつて將來の犯罪と不良に影響を與へることができるのである。卽ち、これも亦、戰爭の犯罪に及ぼす間接な影響なのである。この點に關しては、エックスナーやその他の人々によつて示された事實、卽ち、未曾有の規模をもつた奇怪な實驗として戰爭は、不良及び犯罪の經濟恐慌及び國民の社會的動搖に對する內的な依存關係を明白にしたといふ事實が批判的な觀察者に迫つて來るのである。この現象の意義はたゞにこれらの命題の單なる證明に存するのではない、その命題の正當なことは既に、戰前に於てなされた觀察に基いても必ずしも疑ひ得るものではなかつた。決定的なことは寧ろこの經驗上の命題を一般人の意識に、その眞實さは最早疑ふべくもないといふ程度に印象づけたといふことにあるのである。それは不良と犯罪に對する一般人の態度にとつて端的に決定的な意義を有するのである。この認識に當面して、道德的な憤激と衝動的な應報の無秩序な叫び聲とは消滅した。戰爭犯罪の發展はこのことを極めて明白に示したのである。

戰爭は少年に於てのみ大規模の「頽廢化・不良化」を喚び起し又は促進したのではないといふことは疑ひ得ない。しかしこの事實はそれを呪咀し憤激して價値判斷をなすに理由を與へるものではない。われわれは戰後より今日まで、政治的、教育學的、犯罪學的な諸々の意見に於て——政治鬪爭に於て、新聞紙に於て、又「學問的」な研究の多くの範圍に於て、屢々かゝる意見を見出したのである。が、それは全く誤れる方向に導く手續である。犯罪の認識及び克服に於ける學問的竝に實際的進步に對して、最も危險な敵は、法律違反者に對する倫理的な偏見である。かゝる判斷は常にたゞ感情的であり、決して正確に學問的でなく、全くディレッタントな、主觀的な、實際上危險な認定に赴かしむるのである。しかし、犯罪の豫防克服にとつてはその認定こそ肝要なのである、卽ち、因果律的な認定、人間の病氣の克服や、經濟上の不景氣、恐慌の打開に於ては、われわれは道德的な價値判斷と感情とを嚴密に除いて、事實の純粹な研究、原因と結果の純粹な研究に專心したときに初めて、進步と成果を得たのである。——それと同樣に、犯罪の現象の判斷と取扱ひから偏見や興奮や懊惱を容赦なく除いて、たゞ原因と結果のみを研究の基準となす場合に於て、われわれは犯罪を學問的にも實際的にも克服することが出來るのである。このことはあらゆる刑法上の又刑事・社會政策上の觀察にあてはまるのである。

この研究を對象とする問題にとつては、又世界大戰の犯罪に及ぼす影響の探究にとつては、この方法上の要求は特に痛切なる意義を有するのである。この問題に道德的な憤激の判斷を以て加はるものには、この問題の複雜さに食ひ入るあらゆる可能性が阻まれる。既に日常の・所謂[2]平常の狀態に關する刑法的な研究に於ても、道德的價値判斷は研究者と刑事政策家の眼を曇らせるものである。しかも、犯罪の因果的な要素やその戰爭の影響との密接な關係が引離すべくもなく明らかに前面にあらは

れてくるこの場合に於ては、それらから離れて主觀的な感情的な判斷に逃避することは、刑法上の問題を理解することを不可能にするものであるが故に、特に危險である。

2　犯罪のあらはれるところでは結局に於て社會生活や個人生活の正常な狀態が存在せぬのであるといふ制限は存するであらう。

戰後のドイツはこの道を歩んではゐない。不良化と犯罪との胚種は、戰爭、敗戰、革命の結果により、又インフレーションと經濟恐慌とによつて、巨大に、外見上は全く絶望的に上昇して來たのである。この狀態に對する戰ひは舊派の陳腐な刑法によつては行はれなかつた。實際には、「應報的正義」といふ形式の下に、常に衝動的な防禦の感情と興奮した感情の影響が潛んでゐた。若しこの刑事政策の方向に從ふならば、われわれは刑を重くし嚴格にし、保護收容所や刑務所に假借なき峻嚴の支配を命じなければならぬであらう。多くの刑事學者や政策家によつて勸められたこの處方に從つたならば、結果はどんなであつたらうか。過去の刑法の歷史は、かゝる方策がたゞ住民の全水準を沮喪せしめ頽廢せしめるに資するのみであつて決して犯罪の眞實の原因を把握せしむるものでないことを教へてゐる。かくの如く刑事政策の百年の過去を顧みるの勞を惜しむものは現在の事實からも教へられるであらう。われわれは、犯罪の激增せる時期に於ては、自由刑の支配を制限し、あらゆる餘計な有害な峻嚴さを行刑から除き、そして行刑に教育的な內的な價値を植ゑつけんとしたのである。われわれは少年保護と少年對策を萬遍なく豫防的に、教育的に構成し、これを深めて行き、そして「少年裁判法」(Jugendgerichtsgesetz) に於て理解と保護の精神を「應報的正義」の上位に置いたのである。かゝる新しい規制の成果はわれわれの眼前に在る。われわれは犯罪を制限するに成功してゐる。このことは少年の集團に於て特に明らかにあらはれてゐる。

一九二三年二月十六日の少年裁判法はこの發展の特に明瞭な兆候である。けれども、それは決してその結論ではない。その意義は、多くの贊成者が初め信じてゐたやうに、法律の分野に一種特別な少年保護をつくり出さんとする試みに存するのではなく、寧ろ反對に、少年刑法は一般刑法の指導者としてあらはれるといふ點に存するのである。[3] 既に戰時中に將來の發展を見越してキッチンゲル (Kitzinger) は次のやうに言及してゐる。卽ち、未だ十八歲にならぬからといつて被告人の個性を詳細に調査する理由は決して存せず、又被告人が既に十八歲の誕生日を祝つて了つたからといつてその個性を調査せず又ほんの片手間に調査し、根本的にはたゞ個々の行爲についてのみ調査するに止るといふ理由も存しないと。かくて、少年裁判所の本質的な特徵のうちに、成年者にまで擴張すべき論理的傾向があるのであり、そしてわれわれは、全刑事手續がかくの如く少年法によつて改良され深められるといふことも確實に考慮に入れることが出來るのである。[4] 實際、この成年者に對する司法補助 (Soziale Gerichtshilfe) の形式で行はれ始めたのである。又同樣に自由刑執行に關する原則 (一九二三年) の實施竝にこれを體してドイツ各州の內面的外面的改良以來兎も角今日に於ては既に行刑の教育目的は廣く認められて單に少年に止るもの

ではない。[5] 自由刑の制限と罰金刑によるその補充（一九二一年より一九二四年までの罰金刑法）に關する原則、「條件付の刑の執行猶豫」（恩赦法の裁判官に對する委任に基いて州法によつて規定されてゐる）は少年に對すると同樣成年に對しても適用される。而して又その外にも一般刑法の改正策には到るところ犯罪と刑罰に關する新見解への傾向があらはれてゐる。それはリスト刑法學派の首尾一貫せる發展であり、感情や反感の代りに犯罪と刑罰との科學的な研究を置くこと、換言すれば、犯罪の因果的な要素と法律違反者の個性の特質を探究し、それによつて行爲と行爲者とに對し豫防的な鎭壓的な手段、形式を定め、そして又それ以上に環境に存する危險を克服することの努力から出でてゐるのである。この場合、心理學的、社會學的、教育學的考察がそれぞれこれの將來の發展にとつて最も重要な役割を爲すものであることは筆者には極めて明白である。かくて、犯罪とこれに類する社會的危險とに對する鬪爭の發展にとつて意義のある一つの新しき段階が始まつたのである。

3 Francke, Lit. 102, S.12.
4 Kitzinger, Lit. 211.
5 Liepmann Lit. 248.

この點に、われわれが戰爭犯罪の刑事政策に及ぼす反作用について確證することの出來るものの意義もあり又同時に限界もあるのである。蓋し、戰爭の經驗以來犯罪と不良とに對し否定し得なくなつ

たこの新しき立場を眞面目に考へようとする場合、われわれは社會教育的刑事司法の根本的な要件が今日未だ如何に多く缺けてゐるかを認めるのである。この書に至るまでの諸述作は二重の缺陷を度々指摘したのであつた。卽ち、われわれは、增大する要求を滿足せしめ・計畫的に遂行され・且つ批判的に使用せられた信賴すべき事實探究も有せず、又熾烈なる教育事業にとつての個人的乃至方法的前提も有せぬのである。前者に於ては理論と實踐との意識的な精神上の協力を必要とする。この點については筆者は合衆國に滯在中非常に價値ある刺戟をうけたのであつた。W・ヒーリー（W. Healy）G・グリュック（G. Glueck）P・W・ガァーレット（P. W. Garrett）の著作は大變遲れて今日に至つて初めてドイツに行はれんとしてゐるのである。科學的研究の可能性と落伍者、及び社會的危險者に對する實際的な保護の目的とを結合する施設をチァイルド・ガイダンス・クリニック（child guidance clinics）に做つて設くることは今日のドイツの狀態に於て[6]は極めて緊急事たるを失はぬ。ノール（Noll）やその學派の者の著作に明白に示されてゐるやうに、犯罪現象を品行問題 behaviour problems として理解することはドイツの今日の教育心理學の認識と密接な關係をもつものであることを注目すべきである。

6 Noll, Lit. 311.

この深められた因果的認識は强き教育的處置に對して缺くべからざる前提である。勿論も一つこれに屬するものとして舊き素質——環境說に基く因果的推論を越えた本來的な意味に於ける教育學的な

ものが附け加へられる。これがなかつたならば最も良き刑事學的說明と雖も何等の助けにもなるものでない。この直接な教育學的要求は鎭壓的處置といふ舊き手段から離れ、構成的（Konstruktiv）方法を勇敢に躊躇することなく把握することを要求する。これは凡ての教育と人間の處遇のあらゆる形式とを支配する永遠の命題である。刑法に於ては、人々は餘りに長い間、有效な權力手段を用ひ又勞働と秩序の習慣を馴致することによつて反社會的態度を克服せねばならぬと信じてゐたのである。益々增加する失敗とこれに從事する人々の總てに對して勇氣を沮喪せしむるかゝる制度の反作用とは遂に精力の消耗を來さしめたに相違ない。この場合、强制的な馴致の代りに、解放、自己責任及び結合の手段をとるところの構成的な・內部から打ち立てられた方法のみが役に立つことが出來るのである。これは各時代の眞に天才的な教育家——行刑に於ても然り——の示した道である。戰爭の經驗以後、行刑に於ける新しき方針の深刻な必要を認めてゐるドイツに於ては、今日われわれはその實行に必要な外的及び個人的前提を有するであらうか。戰後起つた社會教育的思想の大いなる高揚に應じて、行刑の教育化が刑務所の仕事の內的外的な革正よりも早いテンポで廣がらうとしてゐることに私は非常な危險を感ずるのである。結局に於て囚人の鎭壓的な處遇を緩和することにのみ存する教育化は必ず强き失望を招き反動に導くであらう。そしてそれは——實際不當ではあるがそれだからといつてそれだけ無效な譯ではない——眞實の教育思想を危險に曝さずばかりなのである。

かく戰爭犯罪の影響をその最近の狀態まで追從するとき、この努力は直接に今日の刑事政策の焦點的な問題に導くのである。かくて戰時の犯罪の意味は、從來の科學的竝に實際的勞作の限界と缺陷を明らかにし、從つて將來に對する任務を明らかにすることである。こゝに論ぜられた如き現象に積極的な反面を與へようとしても、刑事學者はたかだか、完全無缺な方法によつても戰爭の引き起したやうな大量的な犯罪現象は決してこれを克服することが出來ず、況んやこれを豫防することもできぬといふことを知るのみである。が、この必要なる讓遜は將來の努力への內的な義務感情を弛めしめ得るものでもなく、又、今日の狀態に於ては戰爭に際會した國民の犯罪の範圍內に戰爭は必ず惹き起すに相違ない現象に對して存する重き責任を輕減し得るものでもない。

Literatur

A

1 Aereboe, Friedrich, Der Einfluss des Krieges auf die landwirtschaftliche Produktion in Deutschland. Deutsche Serie der „Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Weltkrieges" der Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden. Stuttgart, Berlin, Leipzig 1927.

2 Alsberg, Max, Kriegeswucherstrafrecht. 1. Aufl. Berlin 1916. 2. Aufl. Berlin Januar 1917. 4. Aufl. Berlin November 1917. 5. Aufl. unter dem Titel: Preistreibereistrafrecht, Berlin 1919. 6. Aufl. Berlin 1920. 7. Aufl. Berlin 1922.

3 — Rechtssicherheit und Kriegswucherstrafrecht. Ein Epilog zum Scheindorff-Prozess. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918), Sp. 17—21.

4 — Der Abbau der Wuchergesetzgebung. Recht und Wirtschaft, 10. Jahrg., S. 171—174. Berlin 1921.

5 Altmann-Gottheiner, Elisabeth, Die volkswirtschaftliche Bedeutung der Frauenarbeit in und nach dem Kriege. Recht und Wirtschaft, 5. Jahrg., S. 14—19. Berlin 1916.

6 Anton, Zur Behandlung und Erziehung der geistig zurückgebliebenen und entarteten Kinder. Langensalza 1917.

7 Aschaffenburg, Gustav, Das Verbrechen und seine Bekämpfung. 3. Bd. der Bibliothek der Kriminalistik, Heidelberg. 1. Aufl. 1902. 3. Aufl. 1923.

8 Auer, Georg, Über Verbrecher, Verbrechen und Strafen während des Krieges. Archiv für Kriminologie, 67. Bd. (1916), S. 133.

B

9 Baer, A., und Laquer, B., Die Trunksucht und ihre Abwehr. 2. Aufl. Berlin-Wien 1907.

10 Backhausen, P., Der Einfluss der Revolution auf die Fürsorgeerziehung. „Innere Mission", 1920.

11 Backhausen, Wilhelm, Unsere Fürsorgezöglinge und der Krieg. Zentralblatt für Vormundschaftswesen. 6. Jahrg. (1915), S. 221 bis 225.

12 — Die Vorgänge in der F. E. seit dem 1. April 1914. Zentralblatt für Vormundschaftswesen. 9. Jahrg. (1917/18), S. 25—30.

13 Baller, Krieg und krankhafte Geisteszustände im Heer. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie, 75. Bd. (1919), S. 1.

14 Bamberger, Georg, Geldstrafe statt Gefängnis. Schriften der deutschen Gesellschaft für soziales Recht. Heft 3. Stuttgart 1917.

15 Bajenow, Über die Bedeutung grosser Katastrophen für die Ätiologie einiger psychischer und Nervenkrankheiten. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie. 71. Bd. (1914), S. 808.

16 Baumgarten, Otto, Der sittliche Zustand des deutschen Volkes unter dem Einfluss des Krieges. In der deutschen Serie der von der Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden herausgegebenen „Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Weltkrieges", Band: „Geistige und sittliche Wirkungen des Krieges in Deutschland". Stuttgart 1927.

17 Beck, Die Frau und die Kriegsgefangenen. Nürnberg 1918.

18 Beger, Fritz, Die rückfälligen Betrüger. Kriminalistische Abhandlungen, herausgegeben von Franz Exner. Heft VII. Leipzig 1929.

19 Bendix, Ludwig, Das Fiasko des Kriegswucherstrafrechts. Recht und Wirtschaft, 6. Jahrg., S. 181—184 Berlin 1917.

20 Berlin, Ältesten der Kaufmannschaft. Kriegswucher, Handel und Reichsgericht. Antwort auf den offenen Brief von Lobe. Berlin 1917 (vgl. Lit. 273).

21 Beyer, Einwirkung des Krieges auf das Straffälligwerden jugendlicher Personen. Zeitschrift für Jugendhilfen, herausgegeben vom Verband für Jugendliche in Dresden. 2. Jahrg., S. 116, 3. Jahrg., S. 119. Dresden 1914 und 1915.

22 Binswanger, Otto, Die seelischen Wirkungen des Krieges. 12. Heft: Der Deutsche Krieg. Berlin-Stuttgart 1914.

23 Birnbaum, Karl, Kriminalpsychologie. Berlin 1921.

24 Blaschko, Die Prostitution in Kriegszeiten, Deutsche Strafrechts-Zeitung. 1. Jahrg. (1914), Sp. 491—496.

25 Blaum, Kurt, Der Sparzwang für Jugendliche. Zentralblatt für Vormundschaftswesen. 9. Jahrg. (1917/18), S. 7—9.

26 Blaum-Riebesell-Storck, Reichsjugendwohlfahrtsgesetz. 3. Aufl. 1926.

27 Bloch, Robert, Die Kriegswahrsagerei und ihre Bekämpfung. Archiv für Frauenkunde und Eugenetik. Herausgegeben von Dr. Max Hirsch, Berlin. 5. Bd., S. 63ff. Leipzig und Würzburg 1919.

28 — Die Kriegskriminalität der Frau. Archiv für Frauenkunde und Eugenetik. Herausgegeben von Dr. Max Hirsch, Berlin. 5. Bd., S. 84ff. Leipzig und Würzburg 1919.

29 Bloch, Wilhelm, Die Wirkung des Krieges auf die Jugendlichen. Zentralblatt für Vormundschaftswesen. 7. Jahrg. (1915/16), S. 37—42.

30 Boas, Kurt, Gedanken zur Kriminalpolitik gegenüber jetzigen und früheren Zuchthausgefangenen im Kriege. Archiv für Kriminologie, 67. Bd. (1916), S. 253—262.

31 — Über das unberechtigte Anlegen von Kriegsauszeichnungen, besonders im Verein mit anderen forensischen Komplikationen. Archiv für Kriminologie, 67. Bd. (1916), S. 103—107. Leipzig 1916.

32 Böhme, Hildegard, Der Krieg und die deutschen Jugendfürsorgevereine. Mitteilungen der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge, 9. Jahrg., Heft 5/6 (1. 12. 14), S. 4; 10 Jahrg., Nr. 1 (15. 2. 15), S. 7; Nr. 2 (15. 4. 15), S. 9.

33 Böhme, Hildegard, Jugendliche Arbeiter und Lehrlinge im Kriege. Ungedruckte Hamburger Dissertation. 1923.

34 Böss, Die Not in Berlin. Soziale Praxis und Archiv für Volkswohlfahrt 1923, S. 22ff.

35 Bondy, Curt, Pädagogische Problem im Jugend-Strafvollzug. Hamburgische Schriften zur gesamten Strafrechtswissenschaft. Herausgegeben von Professor Dr. M. Liepmann. Heft 8. Mannheim, Berlin, Leipzig 1925.

36 Bonhoeffer, Karl, Zur psychogenen Entwicklung und Hemmung Kriegsneurotischer Störungen. Monatsschrift für Psychologie 40 (1916), Heft 2—3.

37 — Erfahrungen aus dem Kriege über die Ätiologie psychopathologischer Zustände mit besonderer Berücksichtigung der Erschöpfung und Emotion. Vortrag in Deutschen Verein für Psychiatrie. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie. 73. Bd. (1917), S. 77—95.

38 Bonhoeffer und Ilberg, Über die Verbreitung und Bekämpfung des Morphinismus und Kokainismus. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie, 83. Bd. (1926), S. 228—249.

39 Bonne, Zur Prophylaxe der Roheitsverbrechen und militärischen Vergehen unter besonderer Berücksichtigung der Kriegszeit. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahg. (1916), Sp. 29—35.

40 Bredfeld, Zur gegenwärtigen Strafbarkeitssteigerung bei der Jugend. Sächsische Schulzeitung 1917, Nr. 30.

41 Brennecke, Hans, Zur Frage der Psychologie und der Psychopathologie der Revolution und der Revolutionäre. Langensalza 1922. Beiträge zur Kinderforschung und Heilerziehung, Beihefte zur Zeitschrift für Kinderforschung. Heft 162.

42 Brunner, Karl, Der Kampf gegen die Schundliteratur im Kriege. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahrg. (1916), Sp. 137ff.

43 Büchner, Zahlen zur sozialen und wirtschaftlichen Notlage Berlins. Mitteilungen der städtischen Fürsorgestellen Berlins vom November 1923.

44 Bumke, Oswald, Kultur und Entartung. Berlin 1922. Zweite, umgearbeitete Auflage.

45 Bumm, Bemerkungen zur Aufhebung der Abtreibungsparagraphen des StGB. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 43. Bd. (1922), S. 182—189.

46 Bürger, Leopold, Gerichtliche Medizin und Krieg. Vierteljahrsschrift für gerichtliche Medizin 1918. 56. Bd., Suppl. S. 18.

47 Byloff, Fritz, Über den Beweggrund der Fahnenflucht (Desertion). Archiv für Kriminologie, 69. Bd. (1918), S. 161—185.

48 — Zur Psychologie des Standrechts. Monatsschrift Krim. Psych., 12. Jahrg, (1921/22), S. 78—91.

C

49 Calker, van, Hochverrat und Landesverrat. Majestätsbeleidigung. In der „Vergleichenden Darstellung des deutschen und ausländischen Strafrechts". Bes. Teil. Bd. I, S. 1—108. Berlin. 1906.

50 Chuchul, Schutz der Schwesterntracht. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp. 236.

51 Conrad, § 263 StGB. Betrug durch entgeltliches Kartenlegen. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917), Sp. 169ff.

52 Cermann, Krieg, Strafrecht und Heeresfähigkeit. Deutsche Juristenzeitung 1917, S. 169ff.

53 Cervey, Die Frau im Rüstungsbetriebe, „Volkswohl", 42. Jahrg. (1918), Nr. 22.

54 Curschmann, Zur Kriegsneurose bei Offizieren. Deutsche medizinische Wocheschrift 1916, Nr. 10.

D

55 Dehn, Günther, Grossstadtjugend. Beobachtungen und Erfahrungen aus der Welt der Grossstädtischen Arbeiterjugend. 2. Aufl. Berlin. 1922.

56 Delaquis, Ernst, Strafrechtliche Kriegsziele. Vortrag, gehalten in der Juristischen Gesellschaft zu Frankfurt a. M. am 26. November 1917. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 39. Bd. (1918), S. 276ff.

57 Delbanco, Hamburger Prostitutionsverhätnisse nach Aufhebung der Bordlele. „Abolitionist," Jahrg. 22, Nr. 1.

58 Deutsche Forschungsanstalt für Psychiatrie in München, Die Wirkungen der Alkoholknappheit während des Weltkrieges. Erfahrungen und Erwägungen. Berlin 1923.

59 Deutsche Gesellschaft für öffentliche Gesundheitspflege, Verhandlungen der —. Berlin 1918.

60 Deutsche Gesellschaft zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten, Krieg und Geschlechtskrankheiten. Mitteilungen der Gesellschaft zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten, Bd. 13, Nr. 5/6, S. 111—114. Berlin 1915.

61 Deutsche Juristenzeitung, 1917, Nr. 23/24, S. 1003. Statistik der Strafsachen wegen Zuwiderhandlungen gegen die Vorschriften zur Sicherung der Volksernährung in Preussen.

62 Deutsches Rotes Kreuz, „Not". Eine Heftreihe 1923/24.

63 Deutsche Strafrechts-Zeitung, 1. Jahrg. 1914, Sp. 612, Aufschub der Strafverfahren gegen Krieger; 2. Jahrg. 1915, Sp. 256, Neue Gnadenerweise für Kriegsteilnehmer; 3. Jahrg. 1916, Sp. 59, Die Niederschlagung von Strafverfahren gegen Kriegsteilnehmer; 4. Jahrg. 1917, Sp. 295, Prozess Kupfer; 5. Jahrg. 1918, Sp. 240, Kriegsspielhöllen; Sp. 367, Reichsamnestie; Sp. 109, Die öffentliche Unsicherheit.

64 Deutsche Zentrale für Auslandshilfe, Not und Hilfe 1923/24.

65 Deutsche Zentrale für Jugendfürsorge, Gesamtbericht der Tagung in Frankfurt a. M. am 7., 8. und 9. Oktober 1915. Berlin 1916.

66 — Kriegstagung der deutschen Jugendgerichtshilfen (Vierter Deutscher Jugendgerichtstag) am 12., 13. und 14. April 1917 zu Berlin. Verhandlungsbericht. Berlin 1918.

67 Dietz, H., Kriegsgesetzgebung und Gesetzestechnik. Recht und Wirtschaft, 8. Jahrg., S. 52—54.

Berlin. 1919.

68 Dittmer, Marg., „Abt. III: Fürsorgestelle beim Polizeipräsidium Berlin". Aus der Kriegsarbeit der Fürsorgestelle. Mitteilungen der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge, 10. Jahrg., Nr. 1 (15. 2. 15), S. 4—6

69 — Wandernde Jugendliche. Bericht auf der zweiten Tagung über Psychopathenfürsorge. Verlag Springer, Berlin 1921, S. 40—46.

70 — „Jugendamt und Jugendfürsorge". Vortrag. Verhandlungen der Deutschen Gesellschaft für öffentliche Gesundheitspflege zu Berlin, Jahrg. 1918, Nr. 1.

71 Dix, Walter, Psychologische Betrachtungen über die Eindrücke des Krieges auf einzelne wie auf die Masse. Beiträge zur Kinderforschung und Heilerziehung, Heft 127. Langensalza 1915.

72 Dühren, v., Kriminalstatistik der Jugendlichen 1925 und 1926. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 49. Bd. (1928), S. 255—289.

73 Dünner, Julia, Die Verschiebung der sozialen Schichten durch den Krieg. Die christliche Frau 1919, S. 103ff., 175ff.

74 Duensing, Frieda, Die bisherige Tätigkeit der deutschen Zentrale für Jugendfürsorge. Mitteilungen der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge, 9. Jahrg., Heft 5/6 (1. 12. 14), S. 1.

75 Düwell, Vom inneren Gesicht des Krieges. Beiträge zur Psychologie und Soziologie des Krieges. Jena 1917.

76 Dyrenfurth, Einige gerichtsärztliche Kriegserfahrungen. Viertel-jahrsschrift für gerichtliche Medizin 1918, 56. Bd., Suppl. S. 37.

E

77 Ebermayer, Lobe, Rosenberg, Das Reichsstrafgesetzbuch mit besonderer Berücksichtigung der Rechtsprechung des Reichsgerichts. 3. Aufl. Berlin und Leipzig 1926.

78 Eckstein, Krieg, Mundraub und Notdiebstahl. Sächsisches Archiv für Rechtspflege, 14. Jahrg. (1919), S. 46.

79 Ellger, Hans, Feldpostbriefe früherer Gefangener. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp. 76—79.

80 — Kriegserfahrungen im Strafvollzug. 89. Jahresbericht der Rheinisch-Westfälischen Gefängesellschaft über das Vereinsjahr 1915/16. Düsseldorf 1916.

81 — Fürsorge-Erziehung, Jugendgerichte und Jugendgefängnis, die staatlichen Massregeln gegen die Ver

wahrlosung und Kriminalität Jugendlicher. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 35. Bd. (1914), S. 660ff.

82 Elster, Alexander, Aus der Kriegsgesetzgebung 1914 und 1915. Ein Überblick. Archiv für Frauenkunde und Eugenetik, 2. Bd. (1916), Heft 3, S. 351—358.

83 Endemann, Helmut, Die Hetze als Gefährdungsproblem. Eine strafrechtliche und kriminologisch-politische Studie. Mannheim 1924.

84 Entwurf eines Allgemeinen Deutschen Strafgesetzbuches. Anlage II: Die Entwicklung der Kriminalität im Deutschen Reich seit 1882. Bearbeitet im Statistischen Reichsamt. Reichstagsdrucksache Nr. 3390. II. 1924/27 (19. 5. 27). Berlin.

85 Entzian, Statistische psychopathologische Untersuchungen über die jugendlichen Kriminellen in der Kriegszeit. Zeitschrift für Kinderforschung, 48. Bd., S. 297—304, Berlin 1923.

86 Esslinger, Fritz, Zusammenhänge zwischen Teuerung und Kriminalität. Münchner Dissertation. Heilbronn 1927.

87 Exner, Franz, Krieg und Kriminalität in Österreich. (Veröffentlichung der Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden, Abteilung für Volkswirtschaft und Geschichte.) Wien 1927.

88 — Krieg und Kriminalität. Vortrag. Kriminalistische Abhandlungen. Herausgegeben von Franz Exner, Heft 1. Leipzig 1926.

F

89 Falck und Hirsch, Der Kettenhandel als Kriegserscheinung. 2. Aufl. 1916.

90 Fassbender, Martin, Des deutschen Volkes Wille zum Leben. Berlin 1923.

91 Feisenberger, Die Verfolgung der Kriegsverbrechen und -vergehen. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 7. Jahrg. (1920), Sp. 20—23.

92 Fehlinger, H., Anordnungen zum „Schutze der Jugend" in Bayern. Archiv für Kriminologie, 67. Bd. (1916), S. 72—74.

93 Felisch, Ein deutsches Jugendgesetz. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahrg. (1916), Sp. 435—441.

94 Finger, A., Strafanstalten und Gefängnisse während des Krieges. Gerichtssaal, Bd. 85 (1917), S. 450—490.

95 Finger, E., Der Krieg und Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten. Wien 1916.

96 Fischer, Aloys, Die Zukunft des Jugendschutzes. Heft 5 der Schriftenreihe: Das neue Deutschland in Erziehung und Unterricht. Leipzig 1918.

97 — Die Kulturellen Grundlagen der Erziehung. Erlangen. 1925.

98 Fischer-Zühlke, Deutschland und der Weltkrieg. 2. Aufl. 1918.

99 Flatau, G., Psychotherapie unter Berücksichtigung von Kriegserfahrungen. Med. Klinik 13 (1917), Nr. 4, S. 249—277.

100 Flitner, Wilhelm, Der Krieg und die Jugend. In der deutschen Serie der von der Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden herausgegebenen „Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Weltkrieges", Band: „Geistige und sittliche Wirkungen des Krieges in Deutschland", 1927.

101 Förster, Fr. W., Die deutsche Jugend und der Weltkrieg. Furche-Verlag 1915.

102 Francke, Herbert, Das Jugendgerichtsgesetz. 2. Aufl. Berlin 1926.

103 Francke, E., Der deutsche Arbeitsmarkt im Kriege. Recht und Wirtschaft, 4. Jahrg., S. 176—180. Berlin 1915.

104 Fraenkel, L., Sexuelle Gefährdung der Frau durch den Krieg. Zeitschrift für Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten, 17. Bd. (1916), S. 212—214.

105 Fränkel, Der disziplinare Arrest für Jugendliche. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918), Sp. 167—169.

106 — Massnahmen zur Bekämpfung der Verwahrlosung der Jugend, 2. Aufl. 1916.

107 — Der disziplinare Arrest. Zentralblatt für Vormundschaftswesen, 8. Jahrg. (1916/17), S. 71.

108 — Franz, Rudolf, Der Segen des Krieges für die Strafgefangenen. Blätter für Gefängniskunde, 49. Bd. (1915), S. 221—225.

109 Frede, Lothar und Grünhut, Max, Reform des Strafvollzuges. Kritische Beiträge zum Entwurf eines Strafvollzugsgesetzes. Berlin-Leipzig 1927.

110 Freiesleben, Einzelne Fragen aus dem Gebiet des Landesverrats und der Spionage. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 45. Bd. (1925), S. 237—262.

111 Freimark, Hans, Die Revolution als psychische Massenerscheinung. Historisch-psychologische Studie. Grenzfragen des Nerven- und Seelenlebens in Einzeldarstellungen. Nr. 107. München-Wiesbaden 1920.

112 Freund, Strafvollzug und Krieg. Blätter für Gefängniskunde, 49. Bd. (1915), S. 167—175.

113 Friedmann, Alfred, Kommandogewalt, Kriegsgebrauch und Strafgewalt. Vortrag, gehalten in der von Seiner Exzellenz dem Herrn Etappeninspekteur Generalleutnant v. Stieber befohlenen Besprechung der Kreigsgerichtsräte des Etappengebiets der Zweiten Armee am 13. März 1915 in St.-Quentin. Nur als Manuskript gedruckt. St.- Quentin.

114 Friesen, v., Über die weibliche Kriminalität in den Jahren 1898 bis 1902. Annalen des Deut-

schen Reichs, Jahrg. 1905, S. 391ff.

115 — Weibliche Kriminalität in den Jahren 1903—1910. Annalen des Deutschen Reichs, Jahrg. 1915, S. 71ff.

116 — Frohwein, Aus der Praxis der Wuchergerichte. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 7. Jahrg. (1920), Sp. 94—97.

117 Fuchs, Hermann, Schwindel und Wucher im Kriege. Leipzig. 1917.

G

118 Gautier, Alfred, Contre la répression pénale de l'adultère. Schweiz. Zeitschr. f. Strafrecht, 7. Bd. (1894), S. 355—379.

119 Gäbel, Käthe, Die Beeinträchtigung der Kindererziehung durch die mütterliche Erwerbstätigkeit. Zeitschr. für das Armenwesen 1915, Heft 5/6.

120 — Die Arbeitslosigkeit der Jugendlichen. Zentralblatt für Vormundschaftswesen, 15. Jahrg. (1922/23), S. 145—147.

121 Generalkommission der Gewerkschaften Deutschlands. „Ungeeignete Massnahmen gegen Minderjährige." Korrespondenzblatt der Generalkommission der Gewerkschaften Deutschlands, 26. Jahrg., 11. März 1916, S. 116 ff.

122 Gennat, Brotkartenfälschungen. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918), Sp. 101.

123 Gervai, Kindliche und jugendliche Verbrecher. München 1914.

124 Giesecke, Karl, Im Kampf an der inneren Front. Meine Kriegserlebnisse als Staatsanwalt. Leipzig 1918.

125 Gietl, Max, Landesverrat nach § 89 StGB. Strafrechtliche Abhandlungen. Herausgegeben von v. Lilienthal. Nr. 193. Breslau 1917.

126 Goldschmidt, James, Die Bekanntmachung über die Verfolgung von Zuwiderhandlungen gegen Vorschriften über wirtschaftliche Massnahmen vom 18. Januar 1917 (RGBl. S. 58) Juristische Wochenschrift, 46. Jahrg. (1917), S. 184.

127 Göring, M. H., Kriminal-Psychologie. Handbuch der vergleichenden Psychologie, 3. Bd., 2. Abtlg. Herausgegeben von Gustav Kafka in München. München 1922.

128 Goeze, Die Aufhebung der F. E. und die Neuüberweisungen während des Krieges. Zentralblatt für Vormundschaftwesen, 7. Jahrg. (1915/16), S. 48—53.

129 — Die F. E. im Jahre 1916 und die Not unserer Jugend. Zentralblatt für Vormundschaftswesen, 7.

Jahrg. (1915), Nr. 5, S. 49—50.

130 Grabe, E. v., Spätschicksale von Fürsorgezöglingen und Prostituierten. Archiv für Kriminologie, 75. Bd. (1923), S. 171—200.

131 Grabinski, Bruno, Weltkrieg und Sittlichkeit. Beiträge zur Kulturgeschichte der Weltkriegsjahre. Hildesheim 1917.

132 Gregor, A. u. Voigtländer, Else, Charakterstruktur verwahrloster Kinder und Jugendlicher. Beiheft 31 der Beiheft zur Zeitschr. für angewandte Psychologie. Herausgegeben von William Stern und Otto Lipmann. Leipzig 1922.

133 — Die Verwahrlosung, ihre klinisch-psychologische Bewertung und ihre Bekämpfung. Berlin 1918.

134 Gregor, A., Über Nahrungsmittelschwindel von Fürsorgezöglingen als Kriegsfolge. Berichte des Fürsorgeverbandes. Leipzig 1918.

135 Grönlund, Otto, Om Brottsligheten i Sverige och norge under Kristiden. Statsvetenskaplig Tidskrift. N. F. 1925. 3. Heft. Lund 1925. Vgl. dazu den Aufsatz desselben Verfassers in der Monatsschrift Krim. Psych., 16. Jahrg. (1925), S. 331 ff.: „Über die Kriminalität in neutralen Ländern (Schweden und Norwegen) während der Kriegs- und Nachkriegszeit."

136 Grünhut, Max, Artikel „Kriminalpolitik" im Handwörterbuch der Rechtswissenschaft. Herausgegeben von Stier-Somlo und Elster. Berlin, Leipzig 1928.

137 Gündel, H. v., Ursachen und forensische Beurteilung von Sittlichkeitsdelikten an Hand von 130 Fällen der Akten der Staatsanwaltschaft bei dem Landgericht Göttingen in den Jahren 1912—1921. Ungedruckte Göttinger Med. Dissertation vom 16. Januar 1923.

H

138 Haber, Leo, Krieg und Kriminalität. Die Umschau, 1921, Nr. 13, S. 252—254.

139 Hamm, Zu dem Entwurf eines neuen Gesetzes gegen den Verrat militärischer Geheimnisse. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 35. Bd. (1914), S. 247—249.

140 Hannover, Psychiatrie und Fürsorgeerziehung in Hannover im Krieg und in der Revolution. Psych. -neur. Wochenschr. 1919/20, Nr. 5/6, S. 10.

141 Hanaur, W., Frauenerwerbsarbeit. Frauenhygiene und Krieg. Archiv für Frauenkunde und Eugenetik, 4. Bd. (1919), S. 227 ff.

142 Hau, Lebenslänglich. Berlin 1925.

143 Heindl, Robert, Wirtschaftslage—Bildung—Kriminalität. Archiv für Kriminologie, 76. Bd. (1924), S. 110—114.

144 — Kriminalistische Übergangswirtschaft. Die Kriminalität nach dem Kriege. Archiv für Kriminologie, 70. Bd. (1918), S. 180 ff.

145 — Kriminalität und Krieg. Archiv für Kriminologie, 78. Bd. (1926), S. 63 ff.

146 — Berufsverbrecher. Ein Beitrag zur Strafrechtsreform. Berlin 1926.

147 — Zunahme der Strafsachen in Sachsen. Archiv für Kriminologie, 73. Bd. (1921), S. 291.

148 — Straffälligkeit der Jugend in München. Archiv für Kriminologie, 74. Bd. (1922), S. 289.

149 Heine, Wolfgang, Der Kampf um den Reigen. Vollständiger Bericht über die sechstägige Verhandlung gegen Direktion und Darsteller des kleinen Schauspielhauses Berlin. Berlin 1922.

150 Hellwig, Albert, Himmelsbriefe im Weltkrieg. Monatsschrift Krim. Psych., 12. Jahrg. (1921/22), S. 141—145.

151 — Kriegsschwindler, Monatsschrift Krim. Psych., 12. Jahrg. (1921/22), S. 226—246.

152 — Ein Beitrag zum Kampf gegen das Wahrsageunwesen während der Kriegszeit. Archiv für Kriminologie, 68. Bd. (1917), S. 126 bis. 141.

153 Hellwig, Albert, Der Schutz der Jugend vor erziehungswidrigen Einflüssen. Beiträge zur Kinderforschung und Heilerziehung. Langensalza 1919.

154 — Kriminalität der Jugendlichen im Kriege. Zeitschr. für Kinderschutz und Jugendfürsorge, 8. Jahrg. (1916), Nr. 3.

155 — Kriegsschundliteratur und Kriegsschundfilme. „Hochland", Monatsschrift für alle Gebiete des Wissens, der Literatur und Kunst. Herausgegeben von Karl Muth. 13. Jahrg., 2. Bd., S. 375ff. Kempten und München 1916.

156 — Zur Frage der Strafbarkeit des Wahrsagens. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 42. Bd. (1921), S. 32 ff.

157 — Krieg und Kriminalität der Jugendlichen. Östereich. Rundschau, 49. Bd. (1916), Nr. 5.

158 — Die Kriminalität der Jugendlichen in Dresden unter dem Einfluss des Krieges. Annalen des Deutschen Reichs für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft. Jahrg. 1916, Nr. 7,8,9.

159 — Die Kriminalität der Jugendlichen in Österreich und Ungarn. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 39. Bd. (1918), S. 490.

160 — Zur Gestaltung der Kriegskriminalität. „Der Gerichtssaal", 88. Bd. (1922), S. 100 ff.

161 — Ein Beitrag zum Problem des Verbrechensanreizes durch Schundliteratur. Monatsschr. Krim. Psych., 11. Jahrg. (1914/18), S. 560 ff.

162 — Die Entwicklung der Kriegskriminalität der Jugendlichen. Deutsche Jugendgerichtsbarkeit, 2. Jahrg., Nr. 6.

163 — Der Krieg und die Kriminalität der Jugendlichen. Halle a. d. Saale 1916.

164 Hentig, Hans v., Die revolutionäre Frau. Schweiz. Zeitschr. f. Strafrecht, 36. Bd. (1923). S. 29—45.

165 — Die Veränderungen in der sozialen Struktur Deutschlands und ihr Einfluss auf die Kriminalität. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 7. Jahrg. (1920), Sp. 349—352.

166 — Anlage und Umwelt. Die modernen Formen der Hungersnot. Monatsschrift Krim. Psych., 18. Jahrg. (1927), S. 539—541.

167 — Die Kriminalität einer Grossstadt 1914—1926. Monatsschrift Krim. Psych., 18. Jahrg. (1927), S. 231—232.

168 — Inveterationserscheinungen bei europäischen Bevölkerungsgruppen und ihre kriminologische Bedeutung. Monatsschrift Krim. Psych.. 18. Jahrg. (1927), S. 30ff.

169 — Die Anpassung des Verbrechens an die Deflation. Monatsschrift Krim. Psych., 18. Jahrg. (1927), S. 51.

170 — Zunahme der Brände in Bayern. Monatsschrift Krim. Psych., 18. Jahrg. (1927), S. 210.

171 Hentig, Hans, v., und Viernstein, Theodor, Untersuchungen über den Inzest. Arbeiten aus der bayerischen Kriminal-Biologischen Sammelstelle. 1. Heft. Heidelberg 1925.

172 Heskel, Aus der Kriegsarbeit der Behörde für öffentliche Jugendfürsorge. Blätter für die hamburgische öffentliche Jugendpflege, 17. Jahrg., Heft 2/3, 4/5, Humburg 1918.

173 Heslenberg, Betrachtungen zum Kriegswucherstrafrecht. — Fahrlässigkeit — Unlautere Machenschaften — Kettenhandel. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917), Sp. 25—29.

174 Heymans. Die Psychologie der Frauen. Heidelberg, 2. Aufl. 1924.

175 Hippel, R. v., Kriminalstatistisches. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 41. Bd. (1920), S. 562—568.

176 Deutsches Strafrecht, 1. Bd. Berlin 1925.

177 Hirsch, Über Kriegspsychose des Weibes. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahrg. (1916), Sp. 134ff.

178 Hoegel, Die Straffälligkeit des Weibes. Archiv für Kriminologie, 5. Bd. (1900), S. 231.

179 Höpler, Erwin, Kriminalistische Mitteilungen. Archiv Kriminologie, 66. Bd. (1916), S. 29—41.

180 — Kriminelle Erscheinungen der Nachkriegszeit. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 9. Jahrg. (1922), Sp. 134.

181 — Wirtschaftslage—Bildung—Kriminalität. Archiv für Kriminologie, 76. Bd. (1924), S. 81 ff.

182 — Kriminelle Erscheinungen der Nachkriegszeit. Deutsche Strafrechts-Zeitung 9. Jahrg. (1922), Sp. 66.

183 Hoffmann, Walter, Die Reifezeit, 2. Aufl. 1926.

184 — Psychologie der straffälligen Jugend. Leipzig 1919.

185 Horlacher, M., Alkoholstatistik und Alkoholkriminalität, mit besonderer Berücksichtigung Bayerns. Allgem. Statistisches Archiv. Herausgegeben von H. v. Mayr und Fr. v. Zahn. München 1917. S. 140 ff.

186 Hübner, A. H., Die strafrechtliche Begutachtung von Soldaten. Vortrag im Psychiatr. Verein der Rheinprovinz. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie, 72. Bd. (1916), S. 518.

187 Hurwicz, E., Studien zur Statistik der Sozialkriminalität. Archiv für Kriminologie, 63. Bd. (1915), S. 312—371.

188 — Kriminalität und Prostitution der weiblichen Dienstboten. Archiv für Kriminologie, 65. Bd. (1916), S. 185 ff.

I

189 Isay, Rudolf, Wirtschaftliche Bedeutung und Auslegung der Preistreibereiverordnung. Recht und Wirtschaft, 11. Jahrg., S. 205 bis 214. Berlin 1922.

190 Isserlin, Über psychische und nervöse Erkrankungen bei Kriegsteilnehmern. Würzburg 1917.

J

191 Jacobsohn, L., Die Kriminalität der Jugendlichen und ihre Verhütung. Monatsschrift Krim. Psych., 11. Jahrg. (1914/18), S. 577ff.

192 Jagemann, v., Kriegserfahrungen und Jugendgesetz. Blätter für Gefängniskunde, 51. Bd. (1917), S. 21—26.

193 Jahresbericht, 4. Jahresbericht des Landesgesundheitsamts über das Gesundheitswesen im Freistaat Sachsen 1919—1922. Dresden 1926.

194 Jakobsen, Die Kriegskriminalität der Jugendlichen in München (bis zum Jahre 1918). Ungedruckte Dissertation. München 1920.

195 Jaworski, Josef v., Mangelhafte Ernährung als Ursache von Sexualstörungen bei Frauen. Wiener klinische Wochenschr. 29 (1916), Nr. 34.

196 Jarusalem, Franz, Der Krieg im Lichte der Gesellschaftslehre. Stuttgart 1915.

197 John, Alfred, Die Rückfallsdiebe. Eine Untersuchung über die Erscheinungsformen des Verbrechers. Kriminalistische Abhandlungen. Herausgegeben von Franz Exner. 9. Heft. Leipzig 1929.

198 Jungblut, Die Geschlechtskrankheiten im deutschen Heere während des Weltkriegs 1914—1918 in „Der Kampf gegen die Geschlechtskrankheiten". Mitteilungen der deutschen Gesellschaft zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten, 21. Bd., Nr. 1/2, S. 2—6. Berlin 1924.

199 Junk, Ernst, Der gerichtlich Vorbestrafe im Feld. Wien. 1919.

K

200 Kaftan, Die Strafbaren Handlungen psychisch kranker Angehöriger des Feldheeres. Arch. für Psychiatrie und Nervenkrankheiten, 56. Bd. (1916).

201 Kahl, Wilhelm, Die jüngste Amnestie. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 7. Jahrg. (1920), Sp. 263.

202 Kamnitzer, Demobilisierung des Instinktes. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918), Sp. 347—350.

203 Kankeleit, Heldentum und Verbrechen, Monatsschrift Krim. Psych., 16. Jahrg. (1925), S. 193—201.

204 Kantorowicz, Hedwig, Die gefährdete und aufsichtslose Jugend in den Kriegsjahren 1916—1917. Aus der praktischen Arbeit der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge; S. 46 des Berichtes der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge über ihre Tätigkeit in den Jahren 1916 und 1917. Berlin 1917.

205 Kastan, Max, Asoziales Verhalten jugendlicher geistig abnormer Individuen in und nach dem Kriege. Arch. für Psychiatrie und Nervenkrankheiten, 64. Bd., S. 1ff. Berlin 1922.

206 Kattolinski, Die Vermögenskriminalität während des Krieges in Deutschland. Ungedruckte Leipziger Dissertation. 1925.

207 Kauffmann, Der Kokainismus und Morphinismus in der Kriegs- und Nachkriegszeit vom Gerichtsärztl. Standpunkt. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie, 80. Bd. (1925), S. 391—415.

208 Kern, Eduard, Die Verdrängung des Rechts durch die Gnade. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 43. Bd. (1922), S. 588 ff.

209 Kerschensteiner, Das deutsche Jugendgesetz. S. 37—44 des Werkes von Aloys Fischer, Die Zukunft des Jugendschutzes. 1918. (s. Fischer).

210 Kisch, Zur Psychologie des Ehebruchs der Frau. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 6. Jahrg. (1919),

Sp. 39 ff.

211 Kitzinger, F., Die Aufgaben der Gesetzgebung und Rechtspflege auf dem Gebiet des Jugendschutzes. S. 45—84 des Werkes von Aloys Fischer, Die Zukunft des Jugendschutzes. 1918.

212 — Aktuelles zum Thema „Alkohol und Kriminalität", Deutsche Strafrechts-Zeitung, 7. Jahrg. (1920), Sp. 346—349.

213 Kleemann, E., Kriegserfahrungen im Gefängnis. Archiv für Kriminologie, 67. Bd. (1916), 1. Heft.

214 Kleist und Wissmann, Zur Psychopathologie der unerlaubten Entfernung und verwandter Straftaten. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie 76. Bd. (1921), S. 30.

215 Klimmer, Die bayerische Justizstatistik für die Jahre 1914 und 1915. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917), Sp. 214 bis 217.

216 Klumker, Die nächsten Friedensaufgaben der Jugendfürsorge. S. 90 bis 99 der Werkes von Aloys Fischer, Die Zukunft des Jugendschutzes. 1918.

217 Knaut, Fürsorgezöglinge im Kriege. Mitteil. der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge, 10. Jahrg. (1915), Nr. 2, S. 2—4.

218 Kobes, Rudolf, Der Einfluss des Krieges auf den weiblichen Organismus. Die Umschau, 1919,

S. 358 ff.

219 Köbner, O., Entstehung und Leitgedanken des Entwurfs eines Reichsjugendwohlfahrtsgesetzes. Zentralblatt für Vormundschaftswesen, 11. Jahrg. (1919/20), 23./24. Heft.

220 Köhne, Die Jugendlichen und der Krieg. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahrg. (1916) Sp. 13—18.

221 Koenig, Der Gesundheitszustand in Preussen im Jahre 1924. Zeitschrift für Medizinalbeamte, 39./40. Jahrg., Nr. 2. Berlin 1926.

222 Köppe, H., Kriegsbürokratismus und Steuermoral. Recht und Wirtschaft, 7. Jahrg., S. 166—170. Berlin 1918.

223 Kohlrausch, Eduard, Die Einwirkung des Krieges auf die Kriminalität. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 41. Bd. (1920), S. 175.

224 Kohn, Albert, Wie wohnt unser Proletariat? Wohnungsuntersuchungen der Allgem. Ortskrankenkasse Berlin für die Jahre 1921—1923, 1. Jahrg., S. 438—442. Berlin 1925/26.

225 Kolb, Die nervös Kriegsbeschädigten vor Gericht und im Strafvollzug. München 1919.

226 Koppenfels, Sebastian v., Die Kriminalität der Frau im Kriege. Kriminalistische Abhandlungen. Herausgegeben von Franz Exner. 2. Heft. Leipzig 1926.

227 Kraepelin, Die Wirkungen der Alkoholknappheit im Kriege. Sonderabdruck aus der Internat. Zeitschr. gegen den Alkoholismus. Lausanne 1923. 1. Heft.

228 Kriegsmann, Hermann, Die Zentralisation der öffentlichen Jugendfürsorge in Hamburg. Monatsschrift Krim. Psych., 5. Jahrg. (1908/09), S. 193—224.

229 Kronecker, Strafvorschriften gegen die Verwahrlosung Jugendlicher. Leipziger Zeitschr. f. deutsches Recht, 10. Jahrg. (1916), 8. Heft. S. 576.

230 — Eigennutz in Kriegszeiten. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 1. Jahrg. (1914), Sp. 457—466.

231 — Kriegs- und Sachwucher. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 39. Bd. (1918), S. 465—467.

232 Kühn, Über funktionelle Erkrankungen des Nervensystems bei Kriegsteilnehmern. Zeitschr. f. Medizinalbeamte 1917, Nr. 18.

L

233 Landsberg, J. F., Sexuelle Verwahrlosung der Jugend und ihre Bekämpfung, Arch. f. Sexualforschung, 1. Bd. (1916), S. 111—114.

234 Langenberg, Jugendverwahrlosung und Erziehungsschule. Ein Beitrag zur Sozialpädagogik auf Grund von psychologischen und soziologischen Untersuchungen in Volksschulklassen der Stadt Köln. 1923.

235 Leeson, Cecil, The Child and the War. Being notes on juvenile delinquency. Westminster, King 1917.

236 Lehmann, Heinrich, Wucher und Wucherbekämpfung im Krieg und Frieden. Leipzig 1917.

237 Leo, Werner, Kriegsneurologische Betrachtungen. Langensalza 1917.

238 Leppmann, Psychiatrische und nervenärztliche Sachverstandigentätigkeit im Kriege. Zeitschr. für ärztl. Fortbildung. Organ für prakt. Medizin, 12. Jahrg., S. 673 ff. Berlin 1928.

239 Leyen, R. v. d., Wirkungen des Allerhöchsten Gnadenerlasses vom 4. Aug. 1914 auf Jugendliche. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 36. Bd. (1915), S. 488.

240 — Die Tätigkeit der Berliner JGH. im Jahre 1916. Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 12. Jahrg., Nr. 4 (15. 4. 1917), S. 7—9.

241 — Kriminalität Jugendlicher während des Krieges. Nach den Erfahrungen der Berliner JGH. Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 10. Jahrg., Nr. 3 (1. 7. 1915).

242 — Die Berliner Jugendgerichtshilfe in den Kriegsjahren. Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 14. Jahrg., Nr. 4, 5, 6 (April bis Juni 1919). S. 38—42. Berichtigung Nr. 789, S. 66.

243 — Zur Statistik der Jugendgerichtshilfen. Berliner JGH. Arbeit im 1. Halbjahr 1918. Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 13. Jahrg., Nr. 11 (1. 9. 1918), S. 122—124.

244 Leyen, R. v. d., Berliner JGH. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 42. Bd. (1921), S. 62—78.

245 — Die englische Hungerblockade in ihren Wirkungen auf Kriminalität und Verwahrlosung Jugendlicher. S. 38 ff. des Sammelwerkes „Hunger", Wirkungen moderner Kriegsmethoden. Herausgegeben von Max Bubmann. Berlin 1919.

246 Liebenberg, Massnahmen gegen die arbeitslosen Jugendlichen. 1914. Archiv d. Roten Kreuzes. Nicht gedruckt.

247 Liepmann, M., Die Reform des deutschen Strafrechts. Kritische Bemerkungen zu dem „Strafgesetzentwurf" 1919. Heft 2 der Hamburgischen Schriften z. gesamten Strafrechtswissenschaft. Hamburg 1921.

248 — Artikel „Jugendgefängnisse" und „Strafvollzug" im Handwörterbuch der Rechtswissenschaft. Berlin, Leipzig 1928.

249 — Die Todesstrafe. Ein Gutachten. Berlin 1912.

250 — Kommunistenprozesse. München 1928.

251 — Die Kriminalität der Jugendlichen und ihre Bekämpfung. Vortrag. Tübingen 1909.

252 Lieske, Der Kampf gegen die Abtreibung und das sog. Kriegskinderproblem. Moderne Medizin 8 (1917), Nr. 1.

253 Lilienstein, Die Kriegsneurosen. Therapie der Gegenwart 57 (1916), 12. Heft. S. 461—463.

254 Lilienthal, v., Der deutsche Ausfuhrhandel und § 89 StGB. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 37. Bd. (1916), S. 111—118.

255 Lindenau, Missbräuche in der Kriegswohlfahrtspflege. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp, 328—330.

256 Lindenberg, Die Geschäftstätigkeit der preussischen Gerichte in Strafsachen im Jahre 1915. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahrg. (1916), Sp. 299—303.

257 — Die Geschäftstätigkeit der preussischen Gerichte in Strafsachen im Jahre 1916. Deutsche Stafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917), Sp. 261—264.

258 — Die Geschäftstätigkeit der preussischen Gerichte in Strafsachen im Jahre 1917. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918), Sp. 224—226.

259 — Einfluss des Krieges und der Kriegsfolgen auf die Justizstatistik. In: Festgabe für O. Liebmann, S. 95—102.

260 Liszt, Elsa v., Die Verwahrlosung der Jugend während des Krieges, „Jugendpflege", Monatsschr.

zur Pflege der Schulentlassenen katholischen Jugend. München 1916. 3. Jahrg., Nr. 5, S. 144—152.

261 — Aus der Jugendgerichtshilfe. Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 10. Jahrg., Nr. 1 (15. 2. 1915), S. 6.

262 — Berliner Jugendgerichtshilfe. Jahresbericht 1917. Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 13. Jahrg., Nr. 4, 5, 6. (1. 4. 1918), S. 44.

263 — Die Berliner JGH. im Jahre 1919. Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 15. Jahrg. (Juli—Sept. 1920), S. 76—79.

264 Liszt. Elsa v., Die Kriminalität der Jugendlichen in Berlin. 1. 1. 1925 bis 31. 12. 1925. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 47. Bd. (1926), S. 459—466.

265 — Berliner JGH. 1923 und 1924. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 46. Bd. (1925), S. 300—308.

266 — Berliner JGH. 1921 und 1922. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 44. Bd. (1924), S. 506—511.

267 Liszt, Elsa v., und Leyen, Ruth v. d., Berliner JGH. Aus dem Jahresbericht 1913 und 1914 der Deutschen Zentr. für Jugendgerichtshilfe. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 37. Bd. (1916), S. 119 ff.

268 Liszt, Franz v., Lehrbuch des deutschen Strafrechts. 25. Aufl. Besorgt von Eberhard Schmidt. Berlin-Leipzig 1927.

269 — Der Krieg und die Kriminalität der Jugendlichen. Vortrag in der deutschen Juristischen Gesellschaft, gehalten am 12. 2. 1916. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 37. Bd. (1916), S. 496—516.

270 — Tötung und Lebensgefährdung in der Vergl. Darstellung des deutschen und ausländischen Strafrechts. Bes. Teil, 5. Bd., S. 1 bis 151. Berlin 1905.

271 — Der deutsche Ausfuhrhandel und § 89 StGB. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 36. Bd. (1915), S. 786—792.

272 Leiteratur zur Jugendfürsorge in der Kriegszeit (Gesetze, Erlasse, Verfügungen usw.). Mitteil. der Deutschen Zentr. für Jugendf., 9. Jahrg., Heft 5/6 (1, 12, 1914), S. 4.

273 Lobe, Preissteigerung, Handel und Reichsgericht. Offener Brief an die Ältesten der Kaufmannschaft von Berlin. Leipzig 1917.

274 Loewenfeld-Russ, Hans, Die Regelung der Volksernährung im Kriege. Österreichische und Ungarische Serie der „Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Weltkrieges" der Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden. Wien 1926.

275 Loewenstein, C., Zur Frage der Regelung und Kontrolle des Schlafstellenwesens in Preussen. Deutsche Zeitschr. f. Wohlfahrtspflege, 1. Jahrg., Nr. 11, S. 512, Berlin 1926.

276 Lohsing, Ernst, Feldgerichtliche Erinnerungen eines Deutsch-Österreichers. Archiv für Kriminologie, 73. Bd. (1921), S. 54—69; 101 bis 127; 283—285 und 75. Bd. (1923), S. 59—68; 145—152; 220 bis 223.

277 Lust, Kriegsneurosen und Kriegsgefangene., Münch. med. Wochenschrift 63 (1916), Nr. 52, S. 1829—1830.

M

278 Marcuse M., Vom Inzest. Juristisch-Psychiatrische Grenzfragen, 10. Bd., Heft 3/4. Halle 1925.

279 Marx, Hugo, Das Gesetz des kürzesten Weges. Archiv für Kriminologie, 68. Bd. (1916), S. 218—223.

280 Marx, Ursachen der Verbrechen. Deutsche Vierteljahrsschrift für öffentl. Gesundheitspflege, 60. Bd. (1920), S. 205—225.

281 Mayr, Georg v., Moralstatistik mit Einschluss der Kriminalstatistik (Sozialstatistik I. Teil). Statistik und Gesellschaftslehre, 3. Bd. Tübingen 1917.

282 — Beschleunigung des Ausbaues der Kriegskriminalistik. Archiv für Kriminologie, 71. Bd. (1919), S. 1 ff.

283 Meisel-Hess, Grete, Krieg und Ehe. Kriegshefte des Bundes für Mutterschutz. Berlin 1915.

284 Mende, Helmuth, Deutsche Militärrechtspflege im besetzten feindlichen Gebiet unter besonderer Berücksichtigung Belgiens. Gerichtssaal, 86. Bd. (1919), S. 207—228.

285 Mende, Käthe, Umfrage der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge über die Tätigkeit der Deutschen Jugendgerichtshilfen. Die Jugendfürsorge XII, Nr. 4. S. 8—93. 1917.

286 — Massnahmen gegen die Verwahrlosung der 12—14 jährigen Grossstadtjungen. Konferenz der Deutschen Zentr. f. Jugendf., Abt. Gross-Berlin am 4. 2. 1916. Mitteil. der Deutschen Zentr. f. Jugendf., 11. Jahrg., Nr. 2/3 (1. 4. 1916), S. 1—4.

287 Meseritz, Einfluss des Krieges auf die Kriminalität der Jugendlichen. Deutsche Juristenzeitung, 21. Bd. (1916), Heft 3/4.

288 Meyer, Karl, Kriegswirtschaft und Preistreiberei. Recht und Wirtschaft, 7. Jahrg., S. 84—88. Berlin 1918.

289 — Neue Aufgaben der Strafrechtspflege. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp. 109—112.

290 — „Zu viele Strafen." Deutsche Juristenzeitung 1916, S. 1023.

291 — Kriegswucher und Gegenstände des täglichen Bedarfs. Recht und Wirtschaft, 6. Jahrg., S. 88—92. Berlin 1917.

292 — Kriegsamnestien. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917), Sp. 58 und 5. Jahrg. (1918), Sp. 27.

293 — Entwicklungskeime aus dem Kriegsstrafrecht. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 39. Bd. (1918), S. 299—328.

294 — Über die Niederschlagung von Strafverfahren. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 37. Bd. (1916), S. 796—806; 38. Bd. (1917), S. 651—658; 39. Bd. (1918), S. 675—681.

295 Michel, Rudolf, Verbrechensursachen und Verbrechensmotive. Monatsschrift Krim. Psych., 16. Jahrg. (1925), S. 249.

296 Minde, Die zunehmende Verwahrlosung der Jugend. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg (1915), Sp. 501—506.

297 Mitteilungen der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge, 9., 10., 11., 12., 13. Jahrg., 1914—1918.

298 Mitteilungen des Evangelischen Erziehungsamts der Inneren Mission, 1916.

299 Mittermaier, W., Der Ehebruch. a) In Verhandlungen aus dem Gebiete der Sexualforschung, II, 1, 1919. b) In der Vergl. Darstellung des deutschen und ausländischen Strafrechts. Bes. Teil IV, S. 91—100. Berlin 1906.

300 Mittermaier, W., Einfluss des Krieges auf Kriminalität und Strafrecht. Zeitschr. f. angewandte Psychologie. 14. Bd. (1919), S. 310—315.

301 Moravisik, E., Die Psychosen des Krieges. Wiener med. Wochenschrift 1916. Nr. 39/40.

302 Moses, Gertrud, Zum Problem der sozialen Familienverwahrlosung unter besonderer Berücksichtigung der Verhältnisse im Krieg. Beiträge zur Kinderforschung und Heilerziehung. 175. Heft. Langensalza 1920.

303 Müller, Wilhelm, Wie Deutschlands Jugend den Weltkrieg erlebt. Herausgegeben im Auftrage des Vereins „Kinderhilfe" E. V.

304 Müller, H. v., Der hygienische Jugendschutz. S. 100—146 des Werkes von Aloys Fischer, Die Zukunft des Jugendschutzes. 1918.

N

305 Nadel, Kurt, Wieviel Wohnungen fehlen in Deutschland? Deutsche Zeitschr. für Wohlfahrtspflege, 3. Jahrg., S. 133—137. Berlin 1927/28.

306 Nagel, Eine Betrachtung zugunsten der straffälligen Jugend. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918), Sp. 278—280.

307 Neter, Der seelische Zusammenbruch der deutschen Front. Betrachtungen eines Frontarztes. Süddeutsche Monatshefte 1920, 10. Heft.

308 Neukamp, Die Gesetze und Vorordnungen über die Höchstpreise, insbesondere in ihrer wirtschaftlichen und strafrechtlichen Bedeutung. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp. 35, 39.

309 — Die Ausschaltung unseres Handels durch das Kriegswirtschaftsrecht—eine nationale Gefahr. Berlin 1917.

310 Neuberg, Ein Blick in das Strafsystem des Kriegsrechts. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918), Sp. 271—275.

311 Nohl, Herman, Jugendwohlfahrt. Sozialpädagogische Vorträge. Leipzig 1927.

O

312 Ohrloff, Ernst, Weibliche Fürsorgezöglinge. Die Ursachen ihrer Verwahrlosung und Vorschläge, ihr vorzubeugen. Fr. Manns Pädag. Magazin, 935. Heft. Langensalza 1923.

313 Olshausen, Th. v., Betrügerische Erschleichung von Unfallrenten. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp. 65.

314 Oppenheim, Neurosen infolge Kriegsverletzungen. Berlin 1916.

P

315 Pappritz, Anna, Welchen Erfolg versprechen die neuen gesetzgeberischen Versuche zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten? Recht und Wirtschaft, 5. Jahrg., S. 195/198. Berlin 1916.

316 Pardo, Eigenartige Anwendungsfälle der §§ 267, 363 StGB im Felde. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 39. Bd. (1918), S. 68 ff.

317 Peretti, Krieg und Alkohol. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie, 76. Bd. (1920), S. 649.

318 Peschke, Die Erfolge der Wuchergerichte. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 8. Jahrg. (1921), Sp. 24—26.

319 Peters, Die Wohnungsfrage und ihre Bedeutung für die Kriminalität. Zeitschr. f. Wohnungswesen, 24. Bd., 7. Heft. S. 94—99, Berlin 1926.

320 — Einiges über den Pornographenhandel und seine Bekämpfung. Archiv für Kriminologie, 76. Bd. (1924), S. 226—228.

321 Petersen, Joh., Jugendfürsorge. Berlin 1915.

322 Peitsch, A., Gefährdete Kriegerkinder. Sächsische Schulzeitung 1917, Nr. 26.

323 Pitschel, Werner, Die Praxis in der Wahl der Geldstrafe (1882 bis 1925). Kriminalistische Abhandlungen. Herausgegeben von Franz Exner. 8. Heft. Leipzig 1929.

324 Polligkeit, Die gegenwärtige Notlage und drohende Katastrophe in Deutschland. Verein für öffentliche und private Fürsorge. Dezember 1923.

325 Pollitz, Paul, Die Psychologie des Verbrechers. Kriminalpsychologie. 3. Aufl. 1925. Aus Natur und Geisteswelt, 248. Bd.

326 Pönitz, Karl, Zur Psychologie und Psychopathologie der Fahnenflucht im Kriege. Archiv für Kriminologie, 68. Bd. (1917), S. 260 bis 281.

327 Popp, Ludwig, Der Kapitalbedarf des Baugewerbes, mit besonderer Berücksichtigung des Wohnungsbaues. Das Baugewerbe, 8. Jahrg., Nr. 3, S. 29/30. Berlin 1926.

328 Preussische Wissenschaftliche Deputation für das Medizinalwesen : Beratung über die Frage : Welchen Einfluss hat der während des Krieges innerhalb der bürgerlichen Bevölkerung verminderte Alkoholgenuss auf die geistige und körperliche Gesundheit des Volkes gehabt ? Berichte von Beninder, Bonhoeffer, Partsch. Vierteljahrsschr. f. gerichtliche Medizin, 59. Bd. (1920), S. 1.

329 Prölss, Kriegsjugendschutz. Deutsche Juristenzeitung 1917, S. 185 ff.

330 Psychopathenfürsorge, Tagung über……1. Jagung am 19. 10. 1918 in Berlin. Langensalza 1919. 2. Tagung am 17. 5. 1921. in Köln. Berlin 1921.

331 Pusch, Die Kriminalität im Deutschen Reiche im Jahre 1924. Deutsche Juristenzeitung, 32. Jahrg. (1927), S. 784 ff.

R

332 Rathenau, Zur Wohnungsfrage. Recht und Wirtschaft, 7. Jahrg., S. 102—109. Berlin 1918.

333 Raecke, Über krankhaften Wandertrieb und seine Beziehungen zur unerlaubten Entfernung. Feldärztliche Beobachtungen. Vierteljahrsschr. f. gerichtliche Med. 1919, 57. Bd., 2. Heft, S. 253—306.

334 Rehm, Max, Das Kind in der Gesellschaft. Abriss der Jugendwohlfahrt in Vergangenheit und Gegenwart. München 1925.

335 Reichel, Hans, Ehrschutz und Krieg. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917),. Sp. 217—219.

336 Reichsarbeitsblatt, 15. Jahrg. (1917), S. 643ff.: Die Löhne der Arbeiterschaft während des Krieges.

337 — 14. Jahrg. (1916), S. 985 ff. : Die zahlenmässige Gestaltung der Frauenarbeit während des Krieges.

338 — 14. Jahrg. (1916), S. 734 ff.: Frauenarbeit während des Krieges.

339 — 16. Jahrg. (1918), S. 656 ff.: Über die Entwicklung der Anzahl der Beschäftigten während des Krieges.

340 Reichsarbeitsministerium, Berufsberatung, Berufsauslese und Berufsbildung, Berlin 1928.

341 Reichstag, Verhandlungen des Reichstages, I. Wahlperiode 1920, Anlage 266 zu den Stenographischen Berichten.

342 Reichsrat. Drucksache Nr. 116 der Tagung des Reichsrates von 1926.

343 Resch, H., Schwindel in Kriegszeiten. Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp. 238 ff.

344 — Geisteskrankheiten und Krieg. Allgem. Zeitschr. für Psychiatrie, 72. Bd. (1916), S. 121.

345 Rheinisch-Westfälische Gefängnisgesellschaft. Jahresbericht 1916/1917, insbesondere über die 88. Jahresversammlung am 10. 10. 1917 in Düsseldorf. Düsseldorf 1917.

346 Riebesell. Der Einfluss von Familie und Umwelt auf die Verwahrlosung der Jugendlichen. Zentralblatt für Vormundschaftswesen, 9. Jahrg. (1917/18), S. 205/207.

347 Riss, Beleidigungsprozesse. Deutsche Richterzeitung, 7. Jahrg. (1915), Sp. 363 ff.

348 Roesner, Ernst, Artikel: „Kriminalstatistik“ im Handwörterbuch der Rechtswissenschaft. Herausgegeben von Stier-Somlo und Elster. Berlin, Leipzig 1928.

349 de Roos und Suermondt, Die Kriminalität in den Niederlanden während und nach dem Kriege. Monatsschrift Krim. Psych., 14. Jahrg, (1923), S. 113 ff.

350 Rosenbaum, Hilda, Kriegskriminalistik. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917), Sp. 271.

351 Rotes Kreuz, Deutsches, „Not“. Bilder deutschen Lebens. Berlin-Charlottenburg, Cecilienhaus. 1. Heft 1923. 2. Heft 1924.

352 — Jahresbericht (1. 4. 1923—31. 3. 1924). Berlin-Charlottenburg 1924.

353 Rubmann, Max, Hunger. Die Wirkung moderner Kriegsmethoden. Berlin 1919.

354 Rupprecht, Die Jugendstraffälligkeit in Bayern im Frieden und im Kriege. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahrg. (1916), Sp. 128 bis 133.

355 Rupprecht, Die Prostitution jugendlicher Mädchen in München im Kriegsjahr 1915. Zentralblatt

für Vormundschaftswesen, 8. Jahrg. (1916/17), S. 28.

356 — Die Mordtat eines Neunjährigen. Zentralblatt Vormundschaftswesen, 7. Jahrg. (1915/1916), S. 44.

357 — Die Prostitution jugendlicher Mädchen in München im Kriegsjahr 1916. Zeitschrift für Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten 17 (1916), Heft 7.

S

358 Samulett, Paul, Kriegsschundliteratur. Berlin, Carl Heymanns Verlag, 1916.

359 Schapira, Krieg und Geschlechtskrankheiten, deren strafrechtliche Bekämpfung. Wiener klinische Wochenschrift 29 (1916), Nr. 29.

360 Schierlinger, Wertlose Nahrungsmittelersatzmittel. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 4. Jahrg. (1917), Sp. 238.

361 Schiffer, Der Kampf gegen den Wucher. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 2. Jahrg. (1915), Sp. 326—328.

362 Schmidt, C., Krieg und Kriminalität im vierten Kriegsjahr. Deutsche evangelische Monatsblätter 1918 S. 236 ff.

363 Schmidt, Wilhelm, Forensisch-psychiatrische Erfahrungen im Kriege. Abhandlungen aus der Neurologie, Psychiatrie, Psychologie und ihren Grenzgebieten, Nr. 5. Berlin 1918.

364 Schmidt, Hans, Warum haben wir den Krieg verloren? Das Scheitern des deutschen Angriffs im Frühling und Sommer 1918. 3. Aufl. Hamburg 1925.

365 Schneickert, Hans, Brotkartenfälschungen. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 39. Bd. (1918), S. 590.

366 — Schwindelreisende und Spionage. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 39. Bd. (1918), S. 86 ff.

367 — Das Weib als Erpresserin und Anstifterin. Bonn 1919.

368 Schneider, Kurt, Studien über Persönlichkeit und Schicksal eingeschriebener Prostituierter. 2. Aufl. mit einem Anhang: Die späteren Schicksale, katamnestische Untersuchungen von Luise von der Heyden. Heidelberger Abhandlungen aus dem Gesamtgebiet der Kriminalpsychologie, Heft 4. Berlin 1926.

369 — Die psychopathischen Persönlichkeiten. Handbuch der Psychiatrie, Spezieller Teil, 7. Abt., 1. Teil, herausgegeben von G. Aschaffenburg. Leipzig-Wien 1923.

370 Schulze, An der Quelle des Schleichhandels. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 5. Jahrg. (1918),

Sp. 230 ff.

371 Schuppe, Die Frau in der Kriminalität. Die Polizei, 21. Jahrg. (1923/24), S. 523.

372 Schwandner, Heeresdienst und Strafvollzug, mit besonderer Berücksichtigung der Zuchthausstrafe. Blätter für Gefängniskunde, 49. Bd. (1915), S. 198—200.

373 Schwarte, Max, Der Weltkrieg in seiner Einwirkung auf das deutsche Volk. Leipzig 1918.

374 Sellheim, Hugo, Konstitution der deutschen Frau und ihrer Kinder. Rückblick und Ausblick. Deutsche Zeitschr. für öffentliche Gesundheitspflege 1926.

375 Sellmann, Das Seelenleben unserer Kriegsbeschädigten. Witten-Ruhr. 4. Aufl. 1916.

376 Seyfarth, H., Strafvollzug und Kriegsdienst. Blätter für Gefängniskunde, 49. Bd. (1915), S. 189—197.

377 Siegmund-Schultze, Friedrich, Wirkungen der englischen Hungerblockade auf die Kinder. Sonderabdruck aus „Die Eiche". Vierteljahrsschrift für Freundschaftsarbeit der Kirchen. Berlin 1919.

378 — Jugendfürsorge im Kriege. Mitteil. der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge. 10. Jahrg., Nr. 1 (15. 2. 15), S. 1.

379 — Massnahmen gegen die Verwahrlosung der Jugend: Grossstadtjugend im Alter von 12 bis 14 Jahren. Monatsschrift für Kinderhortwesen 1916, S. 1 ff.

380 — Erich Kocke, Aus dem Leben eines „Halbstarken". Sonderabdruck aus der „Akademisch-Sozialen Monatsschr". Jena 1922.

381 Singer, Das Kriegsende und die Neurosenfrage. Neurolog. Zentralblatt 1919, Nr. 10.

382 Skalweit, August, Die deutsche Kriegsernährungswirtschaft. Deutsche Serie der „Wrirtschafts- und Sozialgeschichte des Weltkrieges". herausgegeben von der Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden. Stuttgart-Berlin-Leipzig 1927.

383 Sommer, Krieg und Seelenleben. Leipzig 1916.

384 Sonntag, Ernst, Ein interessanter gesetzgeberischer Versuch zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten. Recht und Wirtschaft, 5. Jahrg., S. 191—193. Berlin 1916.

385 — Kriminalrechtliche und Kriminalpsychologische Kriegserfahrung. Zeitschr. f. d. ges. Strafrechtswiss., 40. Bd. (1919), S. 544—579; 709—742.

386 Spier, Der Einfluss des Krieges auf das Geschlechtsleben. „Die neue Generation". 12. Jahrg., Heft 5/6.

387 Spliedt, W., Über Psychosen bei Kriegsgefangenen. Psychiatrisch-Neurol. Wochenschr. 1916/17, Nr. 18, S. 331—334.

388 Staehelin, Untersuchungen an 70 Exhibitionisten. Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psy-

chiatrie 102, S. 464 ff. (1926).

389 Staff, v., „Viel Mühe um wenig". Deutsche Strafrechts-Zeitung, 3. Jahrg. (1916), Sp. 295—299.

390 Starke, Verbrechen und Verbrecher in Preussen von 1854 bis 1878. Berlin 1884.

391 Statistics, Judicial Statistics for England and Wales 1918. Part. 1. Criminal Statistics. London 1920.

392 Statistik des Deutschen Reichs:

Band	Kriminalstatistik für das Jahr	Berlin
267	1912	1914
272	1913	1918
284	1914	1920
297	1915	1921
302	1916	1922
304	1917	1923
342	1918	1927
301	1919	1927
346	1920	1928
311	1921	1924
354	1922	1928
320	1923	1925
328	1924	1926
335	1925	1927
347	1926	1928
370	1927	1930

393 Statistik der zum Rapport des preussischen Ministeriums des Innern gehörenden Strafanstalten und Gefängnisse für die Rechnungsjahre 1914, 1915, 1916; Berlin 1916, 1917, 1918.

394 Statistik über die Gefängnisse der Justizverwaltung in Preussen für die Rechnungsjahre 1914, 1923, 1924, 1925; Berlin 1915, 1926, 1927, 1928.

395 Statistik über die Fürsorgeerziehung Minderjähriger und über die Zwangserziehung Jugendlicher. Bearbeitet vom Preussischen Ministerium des Innern für die Rechnungsjahre 1914, 1915, 1916, 1917, 1918, 1919, 1920, 1921/22/23, 1924/25 ; Berlin 1916, 1917, 1918, 1919, 1920, 1921, 1922, 1925, 1928.

396 Statistisches Handbuch der Tschechoslowakischen Republik II. Prag 1925.

397 Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich 1920/21/22, 1923, 1924/25.

398 Stekel, Wilh., Unser Seelenleben im Kriege. Psychologische Betrachtungen eines Nervenarztes. Berlin 1919.

399 Stelzner, Aktuelle Massensuggestionen. Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten, 55. Bd., Heft 2, 1915.

400 Stern, William, Jugendliches Seelenleben im Krieg. Zeitschrift für angewandte Psychologie, Beiheft 12. Leipzig 1916.

401 — Jugendliche Zeugen in Sittlichkeitsprozessen. Leipzig 1926.

402 Stiefler, Forensisch-Psychiatrische Beobachtungen im Felde. Jahrbücher für Psychiatrie, 37. Bd. (1917), S. 19.

403 Stoll, Ergebnisse psychiatrischer Begutachtung beim Kriegsgericht. Juristisch-psychiatrische Grenzfragen, Bd. 10, Heft 5.

404 Strassmann, G., Gerichtsärztliche Erfahrungen und Spätuntersuchungen an Kriegsneurotikern. Deutsche Zeitschr. für die gesamte gerichtliche Medizin, 7. Bd. (1926), S. 309—343.

405 Sträussler, E., Über Selbstmörder und Selbstmordversuche beim Militär. Militärmedizin und Kriegswissenschaft, Heft 5. Wien 1915.

406 Stuttgart: Die Straffälligkeit Jugendlicher in Stuttgart, 1917. Jugendfürsorge, Jahrg. 1919, Nr. 1, 2, 3.

T

407 Többen, Heinrich, Die Jugendverwahrlosung und ihre Bekämpfung. 2. Aufl., Münster i. W. 1927.

408 — Über den Inzest. Leipzig und Wien 1925.

409 — Beitrag zur Psychologie des Landes- und Hochverrats, Vortrag auf der Tagung der Gerichtsärzte in Düsseldorf 1926.

410 — Über Kriegshysterie, insbesondere die sog. Zitterneurose und ihre Behandlung. Ärztliche Sachverständigen-Zeitung 1917, Nr. 16 und 17.

411 — Beiträge zur Psychologie und Psychopathologie der Brandstifter. Berlin 1917.

412 — Über Kriegsbeschädigungen bei Nerven- und Geisteskranken unter besonderer Berücksichtigung der strafrechtlichen Zurechnungsfähigkeit. Münster 1919.

413 Travers, Der Krieg und die Kriminalität. Archiv für Kriminologie, 62. Bd. (1915), S. 393.

414 Trefz, F., Das Münchner Kind nach dem Kriege. Verlag des Münchner Hilfsbundes 1921. Enthält zwei Vorträge: Rupprecht, Verwahrlosung und Straffälligkeit der Jugend; Kerschensteiner, Die Erziehungsnot der Münchner Kinder in und nach dem Kriege.

415 Triloff, Unterschlagung von Feldpostsendungen. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 1. Jahrg. (1914), Sp. 666.

416 Trommer, H., Urkundenfälschung und Betrug im Weltkriege. Heft 6 der Kriminalistischen Abhandlungen. Herausgegeben von Exner. Leipzig 1920.

417 — Die Entwicklung der Kriminalität im Deutschen Reiche im Jahre 1926. Monatsschrift Krim. Psych., 20. Jahrg. (1929), S. 421 bis 427.

U

418 Umbreit, Paul, und Lorenz, Charlotte, Der Krieg und die Arbeitsverhältnisse. „Wirtschafts- und Sozialgeschichte des Weltkrieges", herausgegeben von der Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden. Deutsche Serie. Stuttgart, Berlin und Leipzig 1928.

419 Untersuchungsausschuss, Das Werk des Untersuchungsausschusses der Verfassunggebenden Deutschen Nationalversammlung und des Deutschen Reichstages 1919—1928 über die Ursachen des Zusammenbruchs im Jahre 1918. Bd. 4, 5 und 6, Berlin 1928.

V

420 Veröffentlichungen aus dem Gebiet der Medizinalverwaltung, Heft 225: Das Gesundheitswesen des preussischen Staates. Berlin 1927.

421 Viernstein, Theodor, Über Kriminell gewordene Heeresangehörige während des Weltkrieges. Blätter für Gefängniskunde, 53. Bd. (1919), S. 84—119.

422 Vischer, A. L., Die Stacheldrahtkrankheit. Beiträge zur Psychologie der Kriegsgefangenen. Schweizer Schriften für allgemeines Wissen, Heft 5. Zürich 1918.

423 — Zur Psychologie der Übergangszeit. Basel 1919.

424 Vogel, F., Der Einfluss des Krieges auf die Kriminalität und unsere Seelsorge an den Strafgefangenen. Vortrag, gehalten 1916. Blätter für Gefängniskunde, 52. Bd. (1918).

425 Voigtländer, Else, Veränderungen der Verwahrlosung während des Krieges. Mitteilungen der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge. 13. Jahrg. (1918), S. 24—26.

426 — Die Entwicklung der Verwahrlosung in den Jahren 1924—1920. Zentralblatt für das Vormundschaftswesen, 13. Jahrg. (1921/22), S. 193—197.

427 Vormann, B., Wohnungsverhältnisse in Greifswald. Dissertation. Leipzig 1925.

W

428 Wachholz, Krieg und Verbrechen. Deutsche Zeitschr. für die gesamte gerichtliche Medizin, 1. Bd. (1922), S. 697 ff.

429 Wagner v. Jauregg, Erfahrungen über Kriegsneurosen. Wien 1917.

430 — Kriegsneurologisches und Kriegspsychiatrisches. Wiener medizinische Wochenschrift 1928, Nr. 43.

431 — Die Arbeitsscheu. Archiv für Kriminologie, 74. Bd. (1922), 2. Heft, S. 104—119.

432 Wallroth, Krieg, Strafrecht und Aussenhandel. Deutsche Richterzeitung, 7. Jahrg. (1915), Sp. 284 ff.

433 Wassermann, Rudolf, Beiträge zur Lehre von den Beziehungen zwischen Alkohol und Verbrechen. Gerichtssaal 78. Bd. (1911), S. 445—456.

434 Weigert, Bestechungsunwesen im Kriege. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 8. Jahrg. (1921), Sp. 14—

435 Weiler, Karl, Kriegsgerichtspsychiatrische Erfahrungen und ihre Verwertung für die Strafrechtspflege im allgemeinen. Monatsschrift Krim. Psych., 12. Jahrg. (1921), S. 282ff.; 13. Jahrg. (1922), S. 165 ff.

436 Weiss, Der Zusammenbruch der Wettkonzerne und Sportbanken usw. unter der Rubrik: Aus Praxis, Wissenschaft und Gesetzgebung des In- und Auslandes. Deutsche Strafrechts-Zeitung, 8. Jahrg. (1921), Sp. 293 f.

437 — Das Verbrechen nach dem Kriege. Vossische Zeitung vom 31, 5, 1925.

438 Weniger, Erich, Das Bild des Krieges. Die Erziehung, V (1930), 1—21.

439 Wessel, Annemarie, Wohnungsnot und Kriminalität. Volksblatt für Anhalt vom 8. 9. 1928.

440 Weygandt, Psychiatrische Gutachtertätigkeit im Kriege. München 1917.

441 Wilden, Adolf, Die Kriminalität der Sittlichkeitsdelikte seit 1910. Eine Kriminal-soziologische Studie. Königsberger Dissertation. 1928.

442 Wilhelm, Die Verbrechensbewegung Stuttgarts in der Nachkriegszeit. Deutsches Polizei-Archiv, Monatsschrift für die gesamten Polizeiwissenschaften. Herausgeber: C. Falck. 1. Jahrg., Sp. 513 ff. Berlin 1921.

443 Wilmanns, Karl, Die sog. verminderte Zurechnungsfähigkeit als zentrales Problem der Entwürfe zu einem deutschen Strafgesetzbuch. Berlin 1927.

444 Wirtschaft und Statistik. Herausgegeben vom Statistischen Reichsamt, 6. Jahrg., S. 123; Die Kriminalität im Deutschen Reich. Berlin 1926.

445 Wittig, K., Einfluss des Krieges und der Revolution auf die Kriminalität Jugendlicher. Zeitschrift für Kinderforschung. Jahrg. 1921, Nr. 3.

446 — Die ethisch minderwertigen Jugendlichen und der Krieg. Neudrucke zur Psychologie. Bd. 3 : Der Krieg und die Komplementäre Kulturpsychologie. Herausgegeben von Fritz Giese, Heft 1. Langensalza 1918.

447 — Der Einfluss des Krieges auf die Kriminalität der Jugendlichen und auf Jugendliche Sträflinge. Mit einem Überblick über den Stand der Kriminalität der Jugendlichen bis zum Jahre 1912. Heft 129 der Beiträge zur Kinderforschung und Heilerziehung. Langensalza 1916.

448 — Der Einfluss des Krieges und der Revolution auf die Kriminalität der Jugendlichen und ihre Behandlung im Jugendgefängnis durch Willensübungen. Heft 172 der Beiträge zur Kinderforschung und Heilerziehung. Langensalza 1921.

449 — Der Krieg und Ich-Bekenntnisse eines Jugendlichen Gefangenen. Zeitschrift für Kinderforschung. Jahrg. 1919 (Aug./Sept.).

450 Wolf, Gertraud, Der Frauenerwerb in den Hauptkulturstaaten. München. 1916.

451 Wulffen, Erich, Die Psychologie des Hochstaplers. Zellenbücherei Nr. 69. Leipzig 1923.

452 Wulffen, Erich, Das Weib als Sexualverbrecherin. Ein Handbuch für Juristen, Verwaltungsbeamte und Ärzte. Berlin 1923.

453 — Kriminalpsychologie. Psychologie des Täters. Berlin 1926.

454 Wüterich, Über die Straffälligkeit der Jugendlichen in Stuttgart im Jahre 1917. Mitteilungen des Landesverbands für Jugendfürsorge in Württemberg, Jahrg. 1918, Nr. 25. — Mitteilungen der Deutschen Zentrale für Jugendfürsorge, 12. Jahrg., Nr. 8/9, S. 14.

Z

455 Zaglitz, Karla, Die sittliche Verwahrlosung der weiblichen Jugend. Statistisch-soziologische Untersuchung mit besonderer Berücksichtigung Wiens in der Nachkriegszeit. Abdruck aus der Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik, Neue Folge, 1. Bd., S. 621—718.

456 Zahn, Friedrich, Kriegskriminalität. Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und

Volkswirtschaft im Deutschen Reiche. Herausgegeben von Artur Spiethoff. 47. Jahrg., S. 243 bis 271. München und Leipzig 1924.

457 Zeitschrift des Bayerischen Statistischen Landesamts 1917.

458 Zimmermann, Waldemar, Die Lebens- und Arbeitsverhältnisse der erwerbstätigen Jugend in Deutschland. Vortrag auf der Tagung des Evangelisch-Sozialen Kongresses in Saarbrücken, 27. Mai 1926. In: Verhandlungen des 33. Evangelisch-Sozialen Kongresses. Göttingen 1926.

459 — Erwerbstätigkeit und berufliche Erziehung im Lichte sozialer Politik. In: Petersen-Zimmermann, Die Aufgaben des neuen Berufsschulwesens und die Berufsschulgemeinde. Weimar 1925.

露光量違いの為重複撮影

第一號 大正一〇、一一 定型ナル犯罪ノ調査（略目録）
第二號 〃 一〇、一二 第二回國際少年保護會議報告
第三號 〃 一一、一 瑞西刑事創始會ニ關スル會ニ於ケル議事錄
第四號 〃 一一、三 米國ノ家庭裁判所
第五號 〃 一一、三 獨逸ニ於ケル檢事局及司法警察
第六號 〃 一一、四 米國ニ於ケル少年裁判所ト社會
第七號 〃 一一、五 第一回國際少年保護會議報告書
第八號 〃 一一、六 英國及うえーるずノ警察
第九號 〃 一一、七 復仇ニ關スル佛國法令
第一〇號 〃 一一、八 佛獨國境ニ於ケル調停手續ニ關スル規程
第一一號 〃 一一、九 英國ノ刑事及手ヒ論
第一二號 〃 一一、一〇 英佛ノ緯羅士法制
第一三號 〃 一一、一一 獨逸ノ緯羅士法制
第一四號 〃 一一、一二 理獨ニ於ケル謝罪ノ要件
第一五號 〃 一一、一二 緯羅士倫理
第一六號 〃 一二、一 獨逸國調停法草案及同理由書
第一七號 〃 一二、二 英國監視制度
第一八號 〃 一二、四 定獨法國少年調停法草案同理由書及雛型
第一九號 大正一二、四 獨逸國少年裁判所法草案及同理由書
第二〇號 〃 一二、五 市加古少年裁判所ノ研究
第二一號 〃 一二、五 裁判所ノ獨立
第二二號 〃 一二、六 獨逸國ニ於ケル兒童虐待ニ關スル法律及活動ノ狀況
第二三號 〃 一二、六 瑞西ニ於ケル刑事ノ訴訟手續ニ關スル法律
第二四號 〃 一二、七 獨逸國議會ニ於ケル國際會議ニ關スル法令集
第二五號 〃 一二、七 獨逸國ニ於ケル貿易ニ關スル法律（ボイコット）
第二六號 〃 一二、八 英國ニ於ケル農業勞働者ノ住宅及移轉料
第二七號 〃 一二、八 短期自由刑論
第二八號 〃 一二、九 西班牙國假釋放ニ關スル法令集
第二九號 〃 一二、九 獨佛英ニ於ケル商工業者ニ關スル特別裁判所ノ設置
第三〇號 〃 一二、一〇 獨逸國勞働裁判所法草案及理由書
第三一號 〃 一二、一〇 獨逸國少年裁判所法
第三二號 〃 一二、一一 司法制度改良論
第三三號 〃 一二、一一 獨逸新監獄法
第三四號 〃 一二、一二 勞働爭議ノ調停ニ關スル法律（仲裁及仲裁ノ組合、仲裁判事ノ任命ニ關スル法律）伊國ニ於ケル白耳義ニ關スル法律

Volkswirtschaft im Deutschen Reiche. Herausgegeben von Artur Spiethoff. 47. Jahrg., S. 243 bis 271. München und Leipzig 1924.

457 Zeitschrift des Bayerischen Statistischen Landesamts 1917.

458 Zimmermann, Waldemar, Die Lebens- und Arbeitsverhältnisse der erwerbstätigen Jugend in Deutschland. Vortrag auf der Tagung des Evangelisch-Sozialen Kongresses in Saarbrücken, 27. Mai 1926. In: Verhandlungen des 33. Evangelisch-Sozialen Kongresses. Göttingen 1926.

459 — Erwerbstätigkeit und berufliche Erziehung im Lichte sozialer Politik. In: Petersen-Zimmermann, Die Aufgaben des neuen Berufsschulwesens und die Berufsschulgemeinde. Weimar 1925.

露光量違いの為重複撮影

第一一九號 大正一〇、一二 定刑ヲ犯罪ノ調査ニ關スル獨逸國ト英國トノ條約
第一二〇號 〃 一一、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二一號 〃 一一、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二二號 〃 一一、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二三號 〃 一一、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二四號 〃 一一、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二五號 〃 一一、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二六號 〃 一一、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二七號 〃 一一、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二八號 〃 一一、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一二九號 〃 一一、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三〇號 〃 一一、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三一號 〃 一一、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三二號 〃 一二、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三三號 〃 一二、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三四號 〃 一二、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三五號 〃 一二、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三六號 〃 一二、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三七號 〃 一二、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三八號 〃 一二、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一三九號 〃 一二、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四〇號 〃 一二、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四一號 〃 一二、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四二號 〃 一二、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四三號 〃 一二、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四四號 〃 一三、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四五號 〃 一三、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四六號 〃 一三、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四七號 〃 一三、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四八號 〃 一三、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一四九號 〃 一三、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五〇號 〃 一三、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五一號 〃 一三、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五二號 〃 一三、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五三號 〃 一三、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五四號 〃 一三、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五五號 〃 一三、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五六號 〃 一四、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五七號 〃 一四、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五八號 〃 一四、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一五九號 〃 一四、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六〇號 〃 一四、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六一號 〃 一四、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六二號 〃 一四、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六三號 〃 一四、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六四號 〃 一四、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六五號 〃 一四、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六六號 〃 一四、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六七號 〃 一四、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六八號 〃 一五、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一六九號 〃 一五、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七〇號 〃 一五、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七一號 〃 一五、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七二號 〃 一五、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七三號 〃 一五、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七四號 〃 一五、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七五號 〃 一五、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七六號 〃 一五、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七七號 〃 一五、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七八號 〃 一五、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一七九號 〃 一五、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八〇號 〃 一六、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八一號 〃 一六、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八二號 〃 一六、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八三號 〃 一六、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八四號 〃 一六、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八五號 〃 一六、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八六號 〃 一六、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八七號 〃 一六、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八八號 〃 一六、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一八九號 〃 一六、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九〇號 〃 一六、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九一號 〃 一六、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九二號 〃 一七、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九三號 〃 一七、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九四號 〃 一七、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九五號 〃 一七、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九六號 〃 一七、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九七號 〃 一七、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九八號 〃 一七、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第一九九號 〃 一七、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇〇號 〃 一七、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇一號 〃 一七、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇二號 〃 一七、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇三號 〃 一七、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇四號 〃 一八、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇五號 〃 一八、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇六號 〃 一八、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇七號 〃 一八、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇八號 〃 一八、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二〇九號 〃 一八、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一〇號 〃 一八、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一一號 〃 一八、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一二號 〃 一八、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一三號 〃 一八、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一四號 〃 一八、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一五號 〃 一八、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一六號 〃 一九、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一七號 〃 一九、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一八號 〃 一九、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二一九號 〃 一九、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二〇號 〃 一九、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二一號 〃 一九、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二二號 〃 一九、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二三號 〃 一九、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二四號 〃 一九、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二五號 〃 一九、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二六號 〃 一九、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二七號 〃 一九、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二八號 〃 二〇、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二二九號 〃 二〇、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三〇號 〃 二〇、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三一號 〃 二〇、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三二號 〃 二〇、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三三號 〃 二〇、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三四號 〃 二〇、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三五號 〃 二〇、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三六號 〃 二〇、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三七號 〃 二〇、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三八號 〃 二〇、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二三九號 〃 二〇、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四〇號 〃 二一、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四一號 〃 二一、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四二號 〃 二一、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四三號 〃 二一、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四四號 〃 二一、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四五號 〃 二一、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四六號 〃 二一、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四七號 〃 二一、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四八號 〃 二一、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二四九號 〃 二一、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五〇號 〃 二一、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五一號 〃 二一、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五二號 〃 二二、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五三號 〃 二二、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五四號 〃 二二、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五五號 〃 二二、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五六號 〃 二二、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五七號 〃 二二、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五八號 〃 二二、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二五九號 〃 二二、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六〇號 〃 二二、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六一號 〃 二二、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六二號 〃 二二、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六三號 〃 二二、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六四號 〃 二三、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六五號 〃 二三、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六六號 〃 二三、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六七號 〃 二三、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六八號 〃 二三、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二六九號 〃 二三、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七〇號 〃 二三、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七一號 〃 二三、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七二號 〃 二三、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七三號 〃 二三、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七四號 〃 二三、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七五號 〃 二三、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七六號 〃 二四、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七七號 〃 二四、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七八號 〃 二四、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二七九號 〃 二四、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八〇號 〃 二四、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八一號 〃 二四、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八二號 〃 二四、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八三號 〃 二四、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八四號 〃 二四、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八五號 〃 二四、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八六號 〃 二四、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八七號 〃 二四、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八八號 〃 二五、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二八九號 〃 二五、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九〇號 〃 二五、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九一號 〃 二五、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九二號 〃 二五、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九三號 〃 二五、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九四號 〃 二五、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九五號 〃 二五、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九六號 〃 二五、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九七號 〃 二五、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九八號 〃 二五、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第二九九號 〃 二五、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇〇號 〃 二六、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇一號 〃 二六、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇二號 〃 二六、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇三號 〃 二六、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇四號 〃 二六、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇五號 〃 二六、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇六號 〃 二六、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇七號 〃 二六、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇八號 〃 二六、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三〇九號 〃 二六、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一〇號 〃 二六、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一一號 〃 二六、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一二號 〃 二七、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一三號 〃 二七、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一四號 〃 二七、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一五號 〃 二七、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一六號 〃 二七、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一七號 〃 二七、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一八號 〃 二七、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三一九號 〃 二七、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二〇號 〃 二七、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二一號 〃 二七、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二二號 〃 二七、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二三號 〃 二七、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二四號 〃 二八、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二五號 〃 二八、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二六號 〃 二八、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二七號 〃 二八、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二八號 〃 二八、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三二九號 〃 二八、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三〇號 〃 二八、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三一號 〃 二八、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三二號 〃 二八、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三三號 〃 二八、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三四號 〃 二八、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三五號 〃 二八、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三六號 〃 二九、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三七號 〃 二九、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三八號 〃 二九、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三三九號 〃 二九、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四〇號 〃 二九、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四一號 〃 二九、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四二號 〃 二九、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四三號 〃 二九、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四四號 〃 二九、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四五號 〃 二九、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四六號 〃 二九、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四七號 〃 二九、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四八號 〃 三〇、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三四九號 〃 三〇、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五〇號 〃 三〇、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五一號 〃 三〇、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五二號 〃 三〇、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五三號 〃 三〇、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五四號 〃 三〇、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五五號 〃 三〇、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五六號 〃 三〇、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五七號 〃 三〇、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五八號 〃 三〇、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三五九號 〃 三〇、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六〇號 〃 三一、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六一號 〃 三一、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六二號 〃 三一、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六三號 〃 三一、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六四號 〃 三一、五 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六五號 〃 三一、六 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六六號 〃 三一、七 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六七號 〃 三一、八 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六八號 〃 三一、九 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三六九號 〃 三一、一〇 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三七〇號 〃 三一、一一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三七一號 〃 三一、一二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三七二號 〃 三二、一 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三七三號 〃 三二、二 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三七四號 〃 三二、三 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ犯罪人ノ處罰ニ關スル統計
第三七五號 〃 三二、四 獨逸國ニ於ケル犯罪ノ豫防及ビ

三五號 大正一二、三　職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例（墺國及瑞西之部）
三六號 〃 一二、一　職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例（丁抹瑞典諾威之部）
三七號 〃 一二、一　英國ニ於ケル略式刑事手續及すこつとらんどニ於ケル刑事手續
第三八號 〃 一二、二　佛國借家借地法
第三九號 〃 一二、二　職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例（英國、加奈陀之部）
第四〇號 〃 一二、三　佛國監獄制度及同職員令
第四一號 〃 一二、三　職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例（南弗之部）
第四二號 〃 一二、四　職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例（濠洲之部）
第四三號 〃 一二、四　職業組合、仲裁及仲裁裁判竝ニ賃率契約ニ關スル立法例（米國之部）
第四四號 〃 一二、五　英國法律生活概要及同國ノ刑事控訴制度
第四五號 〃 一二、五　英國裁判所構成論（一、英國裁判官ノ地位（附）司法行政機關）
第四六號 〃 一二、六　英國裁判所構成論（二、英國ニ於ケル起訴官廳及辯護士ノ地位）
第四七號 〃 一二、六　瑞西辯護士法
第四八號 〃 一二、七　露西亞事情
第四九號 大正一二、七　米國ノ刑罰制度
第五〇號 〃 一二、八　獨逸國民事訴訟改正律令
第五一號 〃 一二、八　英國裁判所構成論（三、下級裁判所ノ部　其一、治安裁判所）
第五二號 〃 一二、九　英國裁判所構成論（四、下級裁判所之部　其二、州裁判所及檢屍官裁判所ノ組織）
第五三號 〃 一二、九　英國裁判所構成論（五、中央審トシテノ英國高等法院ノ組織及權限）
第五四號 〃 一二、一〇　佛國商事裁判制度
第五五號 〃 一二、一〇　獨逸國ニ於ケル裁判所ノ組織及ヒ刑事手續ニ關スル法令
第五六號 〃 一二、一一　英國裁判所構成論（六、地方審トシテノ英國高等法院及其他ノ上級裁判所ノ組織）
第五七號 〃 一二、一一　獨逸國勞務契約法草案及評論（附）佛國勞働法正文
第五八號 〃 一二、一二　米國少年裁判法
第五九號 〃 一二、一二　英國裁判所構成論（七、英國ニ於ケル非訟事件裁判所、特種裁判所及仲裁裁判所ノ組織（附）裁判所相互ノ關係）
第六〇號 〃 一四、一　不定期刑言渡ノ制度
第六一號 〃 一四、一　改善不能性犯人ノ處遇
第六二號 〃 一四、二　英國刑事訴訟概觀及巡回裁判所ニ於ケル訴訟記錄
第六三號 〃 一四、二　北米合衆國裁判制度（一、聯邦司法省ノ組織、職制及裁判制度）

第六四號 大正一四、三　獨逸國後見制度（前編）
第六五號 〃 一四、三　獨逸國後見制度（後編）
第六六號 〃 一四、四　刑ノ執行猶豫制度
第六七號 〃 一四、四　假釋放
第六八號 〃 一四、五　國際刑事學協會獨逸支部ニ於ケル行刑上ノ累進制度、宣誓セサル證人ノ處罰及ヒ不定期刑制度ニ關スル會議議事錄
第六九號 〃 一四、五　諸國ノ刑法草案
第七〇號 〃 一四、六　英國司法警察論
第七一號 〃 一四、六　英國ニ於ケル少年犯罪者ニ對スル刑法上ノ處遇
第七二號 〃 一四、七　司法行政上ヨリ見タル普國區裁判所ノ實務（第一篇）
第七三號 〃 一四、七　英國陪審ノ組織資格選定召集等ニ關スル省取調委員會報告書（附）金山檢事宇野判事視察報告書
第七四號 〃 一四、八　漢堡ニ於ケル常設仲裁裁判所
第七五號 〃 一四、八　司法行政上ヨリ見タル普國區裁判所ノ實務（第二篇）
第七六號 〃 一四、九　獨逸國陪審裁判所記錄（附）秋山檢事鈴木判事視察報告書
第七七號 〃 一四、九　刑罰ニ關スル制度（其一）
第七八號 〃 一四、一〇　佛蘭西の政治、行政及び司法制度の概觀）
第七九號 〃 一四、一一　一九二五年獨逸刑法草案竝ニ理由書（總則篇）
第八〇號 大正一四、一二　刑罰ニ關スル制度（其二）
第八一號 〃 一五、一　北米合衆國の刑事裁判（其一）
第八二號 〃 一五、二　北米合衆國裁判制度（二、カリホルニヤ州ノ裁判制度）
第八三號 〃 一五、三　北米合衆國の刑事裁判（其二）
第八四號 〃 一五、四　一九二五年獨逸刑法草案竝に理由書（各論篇）
第八五號 〃 一五、五　陪審制度視察報告書集（附）がるそん教授述陪審制度論
第八六號 〃 一五、五　刑罰に關する制度（其三）
第八七號 〃 一五、六　正義と貧民（其一）
第八八號 〃 一五、七　正義と貧民（其二）
第八九號 〃 一五、七　刑罰に關する制度（其四）
第九〇號 〃 一五、八　刑罰に關する制度（其五）
第九一號 〃 一五、八　英國に於ける警察裁判所
第九二號 〃 一五、九　司法行政上より見たる普國區裁判所の實務（第三篇）
第九三號 〃 一五、九　刑罰に關する制度（其六）完
第九四號 〃 一五、一〇　英國陪審の組織資格選定召集等に關する省取調委員會報告書　第二卷（其一）
第九五號 〃 一五、一〇　諸外國に於ける辯護士制度概觀
第九六號 〃 一五、一一　歐洲諸國に於ける上訴制度
第九七號 〃 一五、一二　佛國裁判制度　第一（治安裁判所の組織及權限）

第九八號　大正一五、三　佛國裁判制度（地方裁判所、控訴院、大審院の組織及權限）
第九九號　〃　一五、三　國際行刑會議報告書集（一）
第一〇〇號　昭和　二、一　國際行刑會議報告書集（二）
第一〇一號　〃　二、一　公の秩序に對する犯罪に關する比較法制論（其一）
第一〇二號　〃　二、二　公の秩序に對する犯罪に關する比較法制論（其二）
第一〇三號　〃　二、二　英國陪審の組織（名格選定名集等に關する省取調委員會報告書　第二卷（其二））
第一〇四號　〃　二、三　司法ニ關スル法制
第一〇五號　〃　二、三　司法行政上より見たる普國區裁判所の實務（第四篇）
第一〇六號　〃　二、四　司法行政上より見たる普國區裁判所の實務（第五篇）完
第一〇七號　〃　二、四　保安處分
第一〇八號　〃　二、五　陪審裁判所に於ける發問（總則篇）
第一〇九號　〃　二、五　陪審裁判所に於ける發問（各論篇）
第一一〇號　〃　二、六　ケート・ウエブスター事件の陪審公判（英國著名裁判　其一）
第一一一號　〃　二、六　單獨判官と司法官制
第一一二號　〃　二、七　國際行刑會議報告書集（三）
第一一三號　〃　二、七　國際行刑會議報告書集（四）
第一一四號　〃　二、八　佛國刑事裁判所の組織及び司法警察
第一一五號　昭和　二、八　チェツコ・スロヴアキア共和國の刑法典草案及同理由書（總則篇）
第一一六號　〃　二、九　米國の勞働法制（上）
第一一七號　〃　二、九　米國の勞働法制（下）
第一一八號　〃　二、一〇　刑法草案集（瑞西一九一八年案、墺一九二二年案、伊一九二一年案）
第一一九號　〃　二、一〇　チェツコ・スロヴアキア共和國の刑法典草案及同理由書（各論篇）
第一二〇號　〃　二、一一　佛國陪審に於ける發問の方式とその判例
第一二一號　〃　二、一一　賭博に關する調査
第一二二號　〃　二、一二　佛國の檢察制度
第一二三號　〃　二、一二　フレデリツク・バイウオーターズ及エデイス・トムソン事件の陪審公判（英國著名裁判　其二）
第一二四號　〃　二、一　一九二七年獨逸刑法草案並に理由書（總則篇）
第一二五號　〃　二、二　大逆罪に關する比較法制資料
第一二六號　〃　二、三　一九二七年獨逸刑法草案並に理由書（各論篇）
第一二七號　〃　二、四　刑法改正に關する比較法制資料（前篇）
第一二八號　〃　二、五　刑法改正に關する比較法制資料（中、後篇）
第一二九號　〃　二、六　佛國裁判所ノ構成ニ關スル法令
第一三〇號　〃　二、七　米國裁判所の組織及び訴訟手續

第一三一號　昭和　二、九　ソヴイエット露西亞の法制（前篇）
第一三二號　〃　二、一〇　ソヴイエット露西亞の法制（後篇）
第一三三號　〃　二、一一　限定責任能力者社會上危險なる精神病者及犯罪的常習飲酒者に對する處遇
第一三四號　〃　二、一一　一九二七年伊太利刑法豫備草案
第一三五號　〃　二、一一　治安判事論
第一三六號　〃　四、一　各國政府の報告に據る私生子の地位に關する研究
第一三七號　〃　四、二　刑の量定（前篇）
第一三八號　〃　四、三　刑の量定（後篇）
第一三九號　〃　四、四　佛に於ける家族制の變遷
第一四〇號　〃　四、五　陪審裁判手續に關する問（前篇）
第一四一號　〃　四、六　陪審裁判手續に關する問（後篇）
第一四二號　〃　四、七　德川幕令考後案（第一帙）
第一四三號　〃　四、八　獨逸司法制度（前篇）
第一四四號　〃　四、九　獨逸司法制度（後篇）
第一四五號　〃　四、一〇　ソヴイエット露西亞民法（前篇）
第一四六號　〃　四、一一　ソヴイエット露西亞民法（後篇）
第一四七號　〃　四、一二　アメリカ合衆國に於ける少年裁判所
第一四八號　〃　五、一　ソヴイエット露西亞刑法
第一四九號　〃　五、二　ソヴイエット露西亞裁判所構成法刑事訴訟法　行刑法
第一五〇號　〃　五、三　英米獨佛の手形法及小切手法
第一五一號　〃　五、四　德川禁令考後案（第二帙）
第一五二號　〃　五、五　佛國民商事裁判管轄
第一五三號　〃　五、六　佛蘭西に於ける檢事の職務
第一五四號　〃　五、七　獨逸刑法及ひ行刑法施行法草案
第一五五號　〃　五、八　獨逸刑法及ひ行刑法施行法草案理由書
第一五六號　〃　五、九　國際行刑會議報告書集　五
第一五七號　〃　五、一〇　國際行刑會議報告書集　六
第一五八號　〃　五、一一　國際行刑會議報告書集　七
第一五九號　〃　五、一二　德川禁令考後案（第三帙）
第一六〇號　〃　六、一　少年保護司指針
第一六一號　〃　六、二　米國イリノイ州に於ける不定期刑言渡並に假釋放に關する調査
第一六二號　〃　六、五　一九二九年末現行カリホルニヤ州刑法（前篇）
第一六三號　〃　六、七　一九二九年末現行カリホルニヤ州刑法（後篇）
第一六四號　〃　六、八　佛國司法制度（前篇）
第一六五號　〃　六、九　佛國司法制度（後篇）
第一六六號　〃　六、一〇　德川禁令考後案（第四帙）
第一六七號　〃　七、一　支那歷代刑事法制の思想（大學衍義補「愼刑憲」篇）　上卷
第一六八號　〃　七、二　支那歷代刑事法制の思想（大學衍義補「愼刑憲」篇）　下卷

第一六九號　昭和七、四　司法事務の經費節減、簡易化及促進（獨逸裁判所書記同盟の改革案）
第一七〇號〃七、六　德川禁令考（第一帙）
第一七一號〃七、八　刑事事件集（附）刑事事件起按小手引
第一七二號〃七、一〇　ソヴイエート法の理論
第一七三號〃七、一二　德川禁令考（第二帙）
第一七四號〃八、三　德川禁令考（第三帙）
第一七五號〃八、五　民事事務修習の栞
第一七六號〃八、八　德川禁令考（第四帙）
第一七七號〃八、九　一九三一年獨逸新民事訴訟法草案竝に說明書（一）
第一七八號〃八、一〇　一九三一年獨逸新民事訴訟法草案竝に說明書（二）
第一七九號〃八、一二　捜査事務に就て
第一八〇號〃八、一二　德川禁令考（第五帙）
第一八一號〃九、一　獨逸刑法第一讀會終了（一九三〇年）
第一八二號〃九、二　犯罪生物學原論
第一八三號〃九、四　德川禁令考（第六帙）
第一八四號〃九、五　ナチスの刑法（プロシヤ邦司法大臣の覺書）
第一八五號〃九、七　プロシヤに於ける司法官教育關係令彙纂
第一八六號〃九、八　英國に於ける裁判と警察
第一八七號〃九、九　德川時代民事慣例集（人事の部）

第一八八號　昭和九、一〇　一九三二年フランス刑法改正豫備草案（總則）竝にポーランド改正刑法及ポーランド違警罪法
第一八九號〃九、一二　取締法規違反の定型（附）特別刑法に於ける犯罪主體と刑罰主體の異なる場合の歸納的觀察
第一九〇號〃九、一三　米國ユター州に於ける不定期刑言渡宣告猶豫及假釋放に關する調査
第一九一號〃一〇、一　一九三〇年獨逸刑法草案竝に現行獨逸刑法典（附錄重要附屬法令）
第一九二號〃一〇、二　德川時代民事慣例集（動產の部）
第一九三號〃一〇、三　獨逸裁判所構成法及同刑事訴訟法
第一九四號〃一〇、四　一九二八年スペイン刑法
第一九五號〃一〇、五　ポーランド新民事訴訟法（一九三三年）
第一九六號〃一〇、六　獨逸刑法提要（上）
第一九七號〃一〇、七　ソヴイエート・ロシアは犯罪を克服する
第一九八號〃一〇、八　伊太利刑法典
第一九九號〃一〇、九　伊太利刑事訴訟法典　附伊太利重罪法院條
第二〇〇號〃一〇、一〇　一九一二年　第二回　海牙萬國手形法統一會議議事錄
第二〇一號〃一〇、一〇　一九一二年海牙に於ける爲替手形及約束手形に付ての審査委員會會議記錄

第二〇二號　昭和一〇、一一　中華民國刑法・刑事訴訟法
第二〇三號〃一〇、一二　ユーゴースラヴキヤ新民事訴訟法
第二〇四號〃一一、一　獨逸刑法提要（中）
第二〇五號〃一一、一　德川時代民事慣例集　不動產の部（上）
第二〇六號〃一一、二　佛國刑事訴訟法
第二〇七號〃一一、三　伊太利刑法典報告
第二〇八號〃一一、三　伊太利刑事訴訟法典報告
第二〇九號〃一一、四　佛國民事訴訟法改正草案
第二一〇號〃一一、四　米國に於ける指紋採取法（附）沃度を以て檢出したる潛在指紋の定着方法（獨）我司法省指紋原紙取扱規程竝指紋分類規程及同基程附表
第二一一號〃一一、五　ナチスの法制及び立法綱要（刑法及刑事訴訟法の部）
第二一二號〃一一、五　英國の刑事裁判
第二一三號〃一一、六　德川時代民事慣例集　不動產ノ部（下）
第二一四號〃一一、六　個人主義的國家概念と法人國家
第二一五號〃一一、七　獨逸刑法提要（下）
第二一六號〃一一、八　德川民事慣例集　訴訟ノ部
第二一七號〃一一、九　ドイツに於ける刑事訴訟手續竝に行刑制度の改正について
第二一八號〃一二、一〇　新獨逸刑法に對する國民社會主義的綱領（舊一部）
第二一九號〃一二、一二　民事司法の疾患外三篇

第二二〇號　昭和一二、一一　刑事政策（犯罪學を基礎とする）
第二二一號〃一二、一二　德川裁判事例（刑事ノ部）
第二二二號〃一二、一二　一九三〇年獨逸國株式會社法及株式合資會社法草案竝說明書
第二二三號〃一二、一二　一九三一年九月獨逸國株式會社法改正に關する緊急律令
第二二四號〃一三、一　一九三五年六月二十八日の獨逸刑法改正法竝刑事訴訟法及裁判所構成法の改正條文と各理由書
第二二五號〃一三、二　獨逸辯護士の新職務法（附）改正獨逸辯護士法條文
第二二六號〃一三、三　佛國法學通論
第二二七號〃一三、三　初等英法教科書
第二二八號〃一三、四　フランス、ドイツ及イギリスに於ける裁判所と判事
第二二九號〃一三、五　第十一回國際刑法及び監獄會議關係論文集
第二三〇號〃一三、六　滿洲帝國新刑法典同草案同施行法新刑事訴訟法典同草案
第二三一號〃一三、七　獨逸刑事判決の作成
第二三二號〃一三、八　新法律學の基本問題
第二三三號〃一三、九　清國全權大臣李鴻章ヲ狙撃シタル小山豐太郎ニ對スル謀殺未遂被告事件記錄
第二三四號〃一三、一〇　將來の獨逸刑法（總則）
第二三五號〃一三、一二　滿洲帝國商事法規

11.5
51

第二三六號　昭和一三、一　將來の獨逸刑法（各則）上　刑法委員會事業報告
第二三七號　〃　一三、二　滿洲帝國民事訴訟法、強制執行法
第二三八號　〃　一三、三　將來の獨逸刑法（各則）下　刑法委員會事業報告
第二三九號　〃　一三、四　一九三七年獨逸株式法理由書
第二四〇號　〃　一三、五　法律家たるの適性に就て（法律家特に判事の職務に就ての心理學的考察）
第二四一號　〃　一三、六　一九三七年獨逸國司法官試補指導者會議錄
第二四二號　〃　一三、七　株式會社貸借對照表論（上）
第二四三號　〃　一三、八　株式會社貸借對照表論（下）
第二四四號　〃　一三、九　獨逸に於ける試補養成上の諸問題
第二四五號　〃　一三、一〇　戰爭と犯罪

14
5
54

終